

西川原古墳群

群馬県埋蔵文化財調査事業団
利根郡川場村
村道生品秋塚線道路改良関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

利根郡川場村

西川原古墳群

村道生品秋塚線道路改良関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2008

2008

群馬県埋蔵文化財調査事業団
利根郡川場村

川 場 村
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

利根郡川場村

西川原古墳群

村道生品秋塚線道路改良関連事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

川 場 村
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



B区1号古墳石室



B区1号古墳石室出土遺物

序

西川原古墳群は群馬県の北部、武尊山の麓、利根郡川場村大字生品に所在し、本年度の9月から10月に村道生品秋塚線の道路工事に先立って発掘調査された遺跡です。

発掘調査は川場村から委託を受け財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施し、調査後すぐに整理事業を実施しました。今回の発掘調査では縄文時代から中近世にかけての遺構・遺物が発見されました。特に古墳時代では7世紀の小型円墳から象嵌が施された大刀鐔をはじめ小刀や鏃、金環などが出土しており、周辺に所在する奈良古墳群や秋塚古墳群などとともに古墳時代のこの地域を考える上で重要な資料となるものであります。

平安時代では竪穴建物が発掘調査されましたが、今まで集落の立地としては想定されていないところでした。このような調査成果は川場村の古代を考える上でたいへん貴重な資料であります。

こうした発掘調査の成果は川場村をはじめ利根郡の古代史説明をはじめ郷土史学習においても大いに役立つものと確信しております。

最後に川場村、川場村教育委員会、群馬県教育委員会文化課、および地元の皆様には発掘調査から報告書刊行まで終始ご協力を賜いました。ここに記して感謝申し上げますとともに本報告書が歴史研究の基本資料として広く活用されることを願い序といたします。

平成20年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は平成19年度村道生品秋塚線改良関連事業に伴う西川原古墳群埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡名については群馬県と群馬県教育委員会文化課と川場村教育委員会との協議により決定している。
2. 発掘調査地点の所在地は下記の通りである。
利根郡川場村大字生品字西川原2145-3、2148-1、2149、2178-2、2206-2
3. 事業主体 川場村
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 2007(平成19)年9月18日～10月17日
6. 調査組織 管理指導 高橋勇夫、木村裕紀、津金沢吉茂、西田健彦、萩原 勉、
事務担当 国定 均、笠原秀樹、石井 清、須田朋子、矢島一美、斉藤陽子、斉藤恵利子、
柳岡良宏、今井もと子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、若田 誠、武藤秀典
調査担当 神谷佳明、高井佳弘、田村邦宏
7. 整理期間 2007(平成19)年10月1日～10月31日
8. 整理組織 管理指導 高橋勇夫、木村裕紀、津金沢吉茂、佐藤明人、萩原 勉、
事務担当 大木神一郎、国定 均、笠原秀樹、石井 清、須田朋子、矢島一美、斉藤陽子、
斉藤恵利子、柳岡良宏、今井もと子、狩野真子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、
北原かおり、武藤秀典
整理担当 神谷佳明
9. 報告書作成者 編集責任 神谷佳明
本文執筆 第1章第1節 田村公夫、第5章 檜崎修一郎、前記以外 神谷佳明
遺構写真撮影 発掘調査担当者、遺物写真撮影 佐藤元彦
遺物観察 縄文土器 原 雅信、他 神谷佳明
保存処理 関 邦一、小村浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子
整理補助 千代谷和子、小林恵美子、阿久津久子、町田礼子、苗木広美
遺物機械実測 田中精子、福島瑞希
10. 調査協力 発掘調査、整理作業にあたり川場村、川場村教育委員会、沼田市教育委員会、群馬県教育委員会、地元生品地区など関係機関をはじめ多くの方々からご協力、ご指導、ご教示を受けた。また、発掘調査では地元川場村や沼田市をはじめ多くの方々に従事していただいた。ここに感謝の意を表する次第であります。
11. 遺物および発掘調査の記録類は利根郡川場村教育委員会にて保管している。

凡 例

1. 西川原古墳群の発掘調査は地点が離れた2カ所を行ったため遺構NO.はそれぞれの調査区の遺構種ごとにNO.1より付与した。
2. 挿図中の方位は座標北を指している。また、座標値は世界測地系を表示している。
3. 本文中・挿図中で使用した略称は下記のとおりである。
Hr-FP 榛名二ツ岳軽石 榛名二ツ岳が6世紀前半に噴出したとき噴出した軽石
挿図 「土」は土坑の略
4. 挿図中の遺構図の縮尺は下記のとおりである。遺構図についてはここにスケールを貼付した。
全体図 1/100 古墳 1/40~1/80 竪穴建物 廃棄・掘方平面、断面 1/60 カマド 1/60
壇 1/80 土坑 1/40
5. 挿図中の遺構図の縮尺は下記のとおりである。
土器 1/3 石器 1/2 金属器 1/2・1/3 その他1/3以外の縮尺で掲載したものは遺物NO.の後に()で縮尺を表記した。
6. 遺構図中に使用した記号はそれぞれの挿図中に凡例で表示してある。また、土層断面中に使用した斜線スクリーンパターンは礫を表している。
7. 挿図中に使用した地形図は下記のとおりである。
国土地理院 1/200,000 昭和58年横山衡器製作所創業100周年調製
国土地理院 1/50,000「沼田」平成15年発行、「追貝」平成2年発行
国土地理院 1/25,000「沼田」昭和53年発行、「後閑」昭和54年発行
群馬県沼田土木事務所一般県道富士山横塚線「利根郡川場村生品地内」現況図 1/500
8. 遺物観察表ではスペースの関係で語彙を下記のように省略している。
出土位置 +数値は床面からの高さを表記している。
計測値 口 口径、底 底径、高 器高、鈔 羽釜鈔部径、頸 頸部径 なお、単位はcm(重さはg)である。
9. 土層観察注記で土層色調および表記方法は農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帳」を参考にした。
10. 遺物観察表での土器色調は農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所 色票監修「新版 標準土色帳」を参考にした。
11. 遺物写真図版では一部語彙を省略している。省略した語彙は下記のとおりである。
縄文時代~弥生時代遺構外出土遺物 縄文・弥生遺構外 中世・近世遺構外出土遺物 中近世遺構外
12. 本報告書では今まで地表面を円形や方形に掘りくぼめが、カマドを設けている遺構を「竪穴住居」、「竪穴式住居」などと慣用的に使用してきたが、近年1992年渡辺修一「『竪穴建物』か『竪穴住居』か」『研究連絡誌』34号(財)千葉県文化財センター、1994年関和彦「竪穴『建物』論の提唱」『日本古代社会生活史の研究』校倉書房によって「竪穴建物」の用語が提唱されていることや掘立柱建物に対応する用語としても適切と考えるので本文中は「竪穴建物」で統一した。なお、周辺の調査遺跡表中では各報告書で使用している用語をそのまま使用した。

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次・表目次・図版目次

I	調査に至る経緯・経過	1
1.	調査に至る経緯	2
2.	調査の経過	4
II	遺跡地の環境	6
1.	地理的環境	6
2.	歴史的環境	7
III	調査の方法	12
1.	調査区の設定	12
2.	調査の手順	12
3.	遺跡地の基本層序	12
IV	検出した遺構と出土した遺物	13
1.	概要	13
2.	縄文時代～弥生時代	17
(1)	土坑・落とし穴	17
(2)	遺構外出土遺物	18
3.	古墳時代	19
(1)	古墳・墓坑	19
4.	平安時代	28
(1)	竪穴建物	28
(2)	土坑	51
(3)	遺構外出土遺物	53
5.	中世・近世	53
(1)	壇	53
(2)	土坑	55
(3)	遺構外出土遺物	57
V	西川原古墳群出土の馬歯・馬骨	58
VI	調査の成果と課題	60

挿図目次

図 NO.	キャプション	頁
1 図	遺跡位置図(1/200,000)	1
2 図	遺跡位置図(1/25,000)	3
3 図	発掘調査区図(1/2,000)	5
4 図	川場村地質図	6
5 図	周辺の調査遺跡図(1/25,000)	9
6 図	川場村の縄文土器・石器分布図(1/100,000)	10
7 図	川場村の古墳と弥生土器・土器分布図(1/50,000)	11
8 図	遺跡地土層堆積模式図	12
9 図	B区発掘調査前現況図	13
10 図	A区発掘調査全体図	14
11 図	B区発掘調査全体図	15・16
12 図	A区9号土坑平面図・断面図・出土遺物図	17
13 図	縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物図	18
14 図	B区1号古墳全体図、周廻遺物出土詳細図、周廻断面図	21
15 図	B区1号古墳石室平面図・断面図、壁面図	22
16 図	B区1号古墳石室遺物出土状態図	23
17 図	B区1号古墳石室跡石状態図	23
18 図	B区1号古墳出土遺物図(1)	23
19 図	B区1号古墳出土遺物図(2)	24
20 図	B区1号古墳出土遺物図(3)	25
21 図	B区1号古墳出土遺物図(4)	26
22 図	B区4号土坑平面図・断面図(1)	27
23 図	B区4号土坑平面図・断面図(2)	28
24 図	B区1号竪穴建物平面図・断面図	29
25 図	B区1号竪穴建物掘方平面図・断面図	30
26 図	B区1号竪穴建物カマド平面図・断面図	30
27 図	B区1号竪穴建物出土遺物図(1)	31
28 図	B区1号竪穴建物出土遺物図(2)	32
29 図	B区2号竪穴建物平面図・断面図	33
30 図	B区2号竪穴建物掘方平面図・断面図	34

図 NO.	キャプション	頁
31 図	B区2号竪穴建物カマド平面図・断面図	35
32 図	B区2号竪穴建物出土遺物図(1)	35
33 図	B区2号竪穴建物出土遺物図(2)	36
34 図	B区3号竪穴建物平面図・断面図	38
35 図	B区3号竪穴建物掘方平面図・断面図	39
36 図	B区3号竪穴建物カマド平面図・断面図(1)	40
37 図	B区3号竪穴建物カマド平面図・断面図(2)	41
38 図	B区3号竪穴建物出土遺物図(1)	41
39 図	B区3号竪穴建物出土遺物図(2)	42
40 図	B区3号竪穴建物出土遺物図(3)	43
41 図	B区4号竪穴建物平面図・断面図	45
42 図	B区4号竪穴建物掘方平面図・断面図	46
43 図	B区4号竪穴建物カマド平面図・断面図	46
44 図	B区4号竪穴建物出土遺物図(1)	47
45 図	B区4号竪穴建物出土遺物図(2)	48
46 図	B区5号竪穴建物平面図・断面図	50
47 図	B区5号竪穴建物掘方平面図	50
48 図	B区5号竪穴建物出土遺物図	50
49 図	B区1号・2号・3号土坑平面図・断面図・出土遺物図	52
50 図	平安時代遺構外出土遺物図	53
51 図	A区壇平面図・断面図	54
52 図	A区壇出土遺物図	54
53 図	A区1号～6号土坑平面図・断面図	55
54 図	A区7号・8号・10号～16号土坑平面図・断面図	56
55 図	中世・近世遺構外出土遺物図	57
56 図	馬歯・馬骨の出土位置	58
57 図	馬歯・馬骨の出土状況復元図(南から見た図)	58
58 図	西川原古墳群出土馬歯出土部位図	59
59 図	生品西浦遺跡A区1号古墳出土土器	61
60 図	古代利根郡の推定区域	62

表 目次

表 NO.	表 題 目	頁
1 表	周辺の調査遺跡概要	8
2 表	中世・近世土坑一覧	55
3 表	西川原古墳群B区1号古墳規模出土馬歯計測値	59
遺物観察表		
	A区9号土坑出土遺物	17
	縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物	19
	B区1号古墳出土遺物	27
	B区1号竪穴建物出土遺物	32

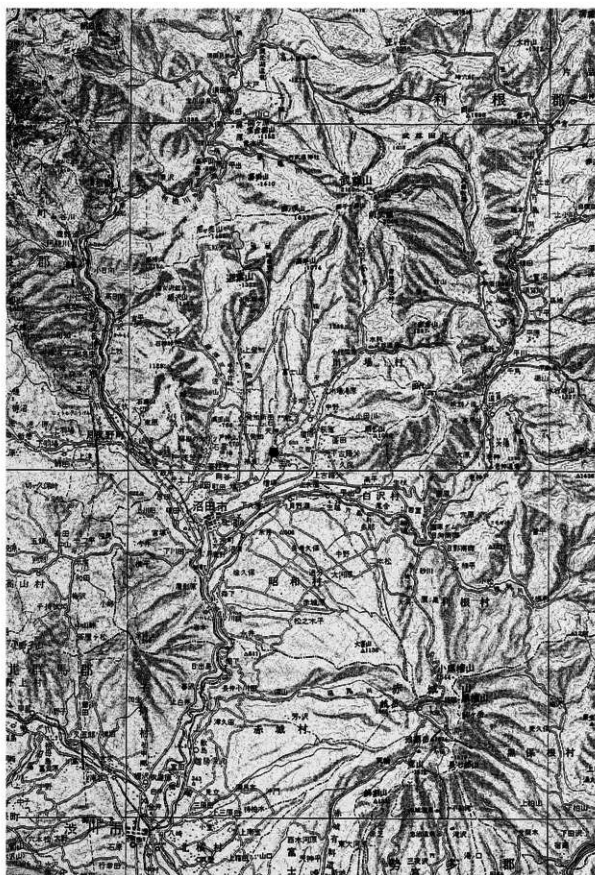
表 NO.	表 題 目	頁
	B区2号竪穴建物出土遺物	37
	B区3号竪穴建物出土遺物	44
	B区4号竪穴建物出土遺物	49
	B区5号竪穴建物出土遺物	51
	平安時代土坑出土遺物	53
	平安時代遺構外出土遺物	53
	A区壇出土遺物	55
	中世・近世遺構外出土遺物	57

図版目次

PL NO.	キャプション	方向
PL 1	A区 全景	南から
	A区 全景	北から
PL 2	B区 全景	東南から
	B区 全景	南から
	A区9号土坑	東南から
	A区9号土坑	底面状態 東南から
	A区9号土坑	土層断面 東南から

PL NO.	キャプション	方向
PL 3	B区1号古墳	調査前 東から
	B区1号古墳	調査前 東から
	B区1号古墳	表土除去後 南から
	B区1号古墳	表土除去後 東から
	B区1号古墳	全景 南から
PL 4	B区1号古墳	石室全景 南から
	B区1号古墳	石室全景 南から

P.L.NO.	キャプション	方向	P.L.NO.	キャプション	方向		
P.L.5	B区1号古墳	石室埋没状態	東から	P.L.11	B区4号竪穴建物	全景	西から
	B区1号古墳	石室埋没状態	近接	B区4号竪穴建物	遺物出土状態	西から	
	B区1号古墳	石室遺物出土状態①	南から	B区4号竪穴建物	埋没土堆積状態	西から	
	B区1号古墳	石室遺物出土状態②	近接	B区4号竪穴建物	カマド	西から	
	B区1号古墳	石室遺物出土状態③	近接	B区4号竪穴建物	カマド	西から	
	B区1号古墳	石室遺物出土状態④	近接	B区4号竪穴建物	カマド掘方	西から	
	B区1号古墳	底面玉形彫刻状態	北から	B区4号竪穴建物	カマド掘方断面	西から	
	B区1号古墳	石室裏込め断面	南から	B区4号竪穴建物	カマド掘方断面	南から	
	B区1号古墳	石室内扉石	南から	P.L.12	B区4号竪穴建物	掘方全景	西から
	B区1号古墳	石室裏込め除去後	南から	B区4号竪穴建物	掘方断面	南から	
P.L.6	B区1号古墳	石室裏込め除去後	北東から	B区5号竪穴建物	全景	南から	
	B区1号古墳	石室下扉石状態	南から	B区5号竪穴建物	全景	西から	
	B区1号古墳	石室下扉石状態	南から	B区5号竪穴建物	埋没土堆積状態	南から	
	B区1号古墳	石室下扉石状態	近接	B区5号竪穴建物	貯蔵穴	西から	
	B区1号古墳	周溝遺物出土状態①	南から	B区5号竪穴建物	貯蔵穴断面	西から	
	B区1号古墳	周溝遺物出土状態②	東から	B区5号竪穴建物	掘方	南から	
	B区1号古墳	周溝遺物出土状態③	近接	P.L.13	B区1号土坑	全景	南から
	B区1号古墳	周溝遺物出土状態④	近接	B区1号土坑	全景	東から	
	B区4号土坑	北から		B区1号土坑	敷石除去後	東から	
	B区4号土坑	東から		B区2号土坑	全景	南から	
P.L.7	B区4号土坑	蓋石除去後	北から	B区2号土坑	埋没状態	南から	
	B区4号土坑	掘石除去後	北から	B区3号土坑	全景	南から	
	B区1号竪穴建物	全景	西から	B区3号土坑	露出土状態	南から	
	B区1号竪穴建物	全景	西から	B区3号土坑	埋没状態	南から	
	B区1号竪穴建物	遺物出土状態	西から	P.L.14	A区壇	全景	西から
	B区1号竪穴建物	遺物出土状態	近接	A区壇	全景	東から	
	B区1号竪穴建物	埋没土堆積状態	南から	A区壇	断面	東から	
	B区1号竪穴建物	カマド	西から	A区壇	断面	東から	
	B区1号竪穴建物	カマド断面B-B'	西から	A区1号土坑	全景	西から	
	B区1号竪穴建物	カマド掘方	西から	A区2号土坑	全景	西から	
P.L.8	B区1号竪穴建物	掘方全景	西から	A区3号土坑	全景	西から	
	B区1号竪穴建物	掘方断面	西から	A区4号・5号・6号土坑	全景	南西から	
	B区2号竪穴建物	全景	西から	P.L.15	A区7号土坑	全景	南から
	B区2号竪穴建物	遺物出土状態	西から	A区8号土坑	全景	南から	
	B区2号竪穴建物	貯蔵穴	西から	A区10号土坑	全景	西から	
	B区2号竪穴建物	埋没土堆積状態	北から	A区11号土坑	全景	西から	
	B区2号竪穴建物	カマド	西から	A区12号土坑	全景	西から	
	B区2号竪穴建物	カマド断面	西から	A区13号土坑	全景	北から	
	B区2号竪穴建物	カマド掘方	西から	A区14号・15号土坑	全景	南から	
	B区2号竪穴建物	カマド掘方断面	西南から	A区16号土坑	全景	南から	
P.L.9	B区2号竪穴建物	掘方全景	西から	P.L.16	A区9号土坑出土遺物		
	B区2号竪穴建物	掘方全景	南から		縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物		
	B区3号竪穴建物	全景	西から	B区1号古墳出土遺物			
	B区3号竪穴建物	遺物出土状態	西から	P.L.17	B区1号古墳出土遺物		
	B区3号竪穴建物	埋没土堆積状態	南から	P.L.18	B区1号竪穴建物出土遺物		
	B区3号竪穴建物	カマド	西から	B区2号竪穴建物出土遺物			
	B区3号竪穴建物	カマド天井部補強状態	西から	P.L.19	B区2号竪穴建物出土遺物		
	B区3号竪穴建物	カマド天井部・補強状態	西から	B区3号竪穴建物出土遺物			
	B区3号竪穴建物	カマド補強状態	西から	P.L.20	B区3号竪穴建物出土遺物		
	B区3号竪穴建物	カマド断面A-A'①	南西から	B区4号竪穴建物出土遺物			
P.L.10	B区3号竪穴建物	カマド断面傾道部	南から	P.L.21	B区4号竪穴建物出土遺物		
	B区3号竪穴建物	カマド掘方	西から	B区5号竪穴建物出土遺物			
	B区3号竪穴建物	掘方全景	西から	B区1号土坑出土遺物			
	B区3号竪穴建物	貼床断面	西から	B区2号土坑出土遺物			
				中世・近世遺構外出土遺物			



1 図 遺跡位置図 (1/200,000)

● 遺跡地

I 調査に至る経緯・経過

1. 調査に至る経緯

川場村道生品秋塚線は、川場村生品で接する県道富士山横塚線が沼田市環状線から川場スキー場までのバイパス建設(沼田市環状線の沼田市上原～県道富士山横塚線と合流する川場村生品までは市道および村道である。村道部分は群馬県沼田土木事務所にて計画され、2001年度、2002年度、2004年度に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で「生品西浦遺跡」として発掘調査が行われ、2005年3月に報告書が刊行されている。)を進める中、現在の村道では取付部の傾斜が急になり、特に冬季には積雪や凍結により車両の通行が困難になり迂回をしていることから新規に建設することとなった。

平成17年9月よりこの村道改良工事に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、川場村田園整備課・川場村教育委員会と群馬県教育委員会文化課で協議を重ねてきた。

村道新設地には、上毛古墳総覧(昭和13年3月31日刊行、群馬県)に川場村56号～65号古墳が記載されている。平成18年1月13日に全村を対象に、村教委と県教委で包蔵地再確認を行い、平成18年3月8日付けで群馬県文化財情報システムに登録し、本地域は「西川原古墳群」として掲載された。

当地域の試掘・確認調査を実施するにあたり、村教委には埋蔵文化財専門職員が配置されていないことから、平成18年3月16日付け(川教発第33号)で村教委から県教委に職員派遣依頼があり、平成18年3月29日に県教委文化課職員により調査を実施した。その結果、県教委は古墳と住居跡を確認し、発掘調査が必要であることを村教委に伝え、村教委は村田園整備課に遺跡が確認され、発掘調査が必要であることを通知した。

平成19年3月9日付けで川場村長(田園整備課)

より文化財保護法第94条の通知が村教委を経由し、県教委へ提出された。県教委は平成19年3月13日付け(文第722-93号)で「工事着手前に発掘調査を実施するよう」勧告を行った。この発掘調査の実施にあたっては、村教委には埋蔵文化財専門職員が配置されていないことから、県教委文化課が支援を行うこととし、事務処理は村教委が行い、本発掘調査については、隣接する県道富士山横塚線の発掘調査を実施している財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行うことで調整した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団では、平成19年度事業として取組、平成19年6月1日付けで川場村長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で「埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約」を締結した。本契約を受けて、事業団は村教委へ平成19年6月27日付け(群埋第34-8号)で文化財保護法第92条の届出を行った。村教委は、平成19年6月27日付け(川教発第84号)により、県教委へ進達した。県教委は平成19年7月2日付け(文第720-23号)により発掘調査の指示を村教委を経由し財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長へ通知した。



2図 遺跡位置図(1/25,000)

● 調査地点

2. 調査の経過

発掘調査は2地点に分割しているため薄根川上位河岸段丘面の地点をA区、中位河岸段丘面の地点をB区と呼称することにした。調査面積はA区285㎡、B区591㎡の計876㎡である。なお、B区の道路部分は357㎡である。発掘調査は調査の効率や排出土の仮置き場などのため2007年7月1日から10月31日までの期間で3ヶ月間の予定で実施する県道富士山横塚線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（生品西浦遺跡J区とH・I区の前年度未了であった旧石器調査）期間内の1ヶ月を予定していた。そのため生品西浦遺跡J区の調査が終了した後の2007年9月18日よりA区、B区を同時に着手した。

A区・B区とも古墳および古墳と見られる小規模な土山が存在するため、その箇所を除いて表土を重機で掘削した。その結果、A区の土山周囲には周堀などが確認できないことから土山が古墳であるか否かを確認するため頂上部中央に交点として十字状に試掘坑を設定した。また、表土10～20cmほど除去したところ表土層下がすぐにローム層であったことから縄文時代から中世・近世の遺構検出作業を行った。これらの調査の結果、土山は近世以降の「お宮」を祭った壇であることが判明し、ローム面からは16基の土坑を検出した。壇遺構は表面を覆っていた土砂を除去した後に盛り土を掘削し、盛り土層下の遺構検出とともに5×2mの試掘坑を設定してローム層下の試掘を行い10月9日に終了した。

B区は現状が栗の果樹園であり、樹木の上部だけが伐採された状態のため、重機掘削に支障があるため、根本からの伐採を行った。その後、土山に露出している礫の状態などから古墳であることが明確であることから、まず後世の耕作等で寄せ集められた小礫を取り除く作業を行うとともに表土掘削を行った。その結果、古墳は石室天井部の礫は残存していないことと側壁および奥壁上部の礫は大部分が消失しており、一部残存しているものも原位置を保っていないこと、墳丘の盛土は全く残存していないこと

が判明した。しかし、石室や石室裏込めの下部は良好な状態であることからすぐに石室の調査に着手した。古墳の石室は下部の残存状態が良好であったことや石室に使用されている礫が人手では動かされる重量でないことからB区の調査期間の当初から最後まで時間を要した。また、古墳の周辺からは堅穴建物5軒と土坑3基、石棺墓1基などを検出した。堅穴建物一部重複が確認されたことによって新旧を確認しながらも掘削可能な範囲は平行しながら調査を行った。調査では埋没状態を観察するための断面観察用のベルトを残し、床面までの掘削、カマド調査、掘方の調査を行った。調査は遺構の調査終了後、試掘坑を設定して堆積しているHr-FP層下、黒色土層下の礫層上面での遺構確認を行い終了した。

なお、埋め戻しは生品西浦遺跡H区・I区の旧石器調査の埋め戻しと一緒に実施した。また、出土遺物は土器などが遺物収納用箱で5箱と大刀や簾などの金属器が出土した。土器の洗浄・注記は報告書刊行の整理期間が迫っているため調査終了後担当者および整理補助員によって行った。金属器の錆落としなどの処理は当事業団保存処理室で実施した。



3図 発掘調査区図(1/2,000)

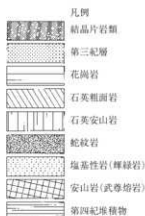
II 遺跡地の環境

1. 地理的環境

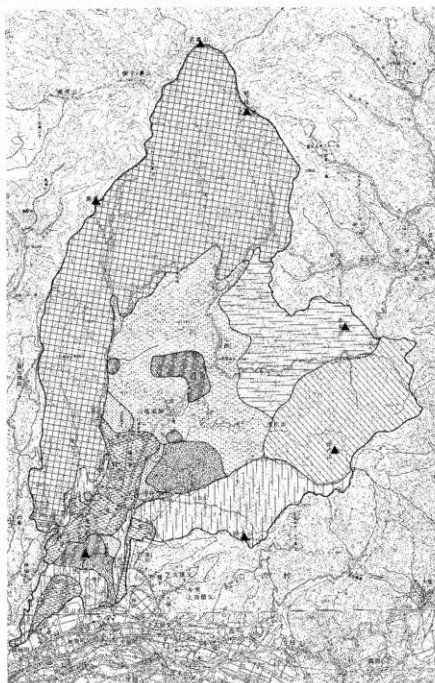
川場村は県の北部、標高2,158mの武尊山の南麓に位置する。標高は村役場付近で520m、生品の集落では470～480mである。気候は涼涼であり、年平均気温は11.0℃、冬は平均気温6.3℃まで下がる。山岳地帯の積雪量は多く、年によって異なるが2～3mに達することもある。しかし、生品では日陰などを除いてほとんど根雪となることはない。地形的には南西部を除いて三方を武尊山、赤倉山、赤松山、田代山、雨乞山、高手山に囲まれ、村面積85.2kmの約80%が山林で占められている。これらの山地から流れ出す薄根川、桜川、溝又川、田沢川が標高600mにかかるあたりからその流域に平地を形成する。この平地は幅約1km、長さ4kmにわたり、各河川に沿ってほぼ北東から南西に続くが、上記四河川がほぼ並行して流れるため、利根郡内の他の利根川支流の平地よりやや広いのが特徴的である。この平地にはかなりの起伏があり、微高地上は集落、畑地に、低地部は水田として利用がなされている。しかし、この起伏も近年の圃場整備によってほとんど平坦にされてしまっている。

遺跡はこれら河川のうち薄根川に桜川が合流した200mほど下流200m左岸に形成された河岸段丘面に立地している。そしてA区は上位河岸段丘面から段丘崖に移行する地点、B区は中位河岸段丘面に立地する。各地区の標高はA区470～472m、B区463～464mである。

遺跡地の北東に位置する後山は中生層および、蛇紋岩からなる山で武尊山から流れ出ている薄根川によって現在の山形を形づけられている。これら川場村の地形形成には前述の山々と古川場湖と薄根川をはじめ、諸支流の河川による浸食と堆積作用が大きな役割をはたしている。



6



4図 川場村地質図(1/50,000)

2. 歴史的環境

川場村の遺跡・遺物散布地は河川に沿った平地および平地縁辺部の丘陵緩斜面に集中する。しかし、村内での発掘調査事例は少なく詳細な点は不明である。本項では西川原古墳群を中心に周辺遺跡について概観する。

旧石器時代 川場村内では隣接する生品西浦遺跡のD区、H・I区でややまとまった出土を見ることができ。生品西浦遺跡ではD区で台石や剥片がまとまって出土しており、石器製作工房と見られる。H・I区では円礫や縦長剥片などが出土しているが、散発的な出土でしかない。これらの石器はともに浅間山B層下からの出土である。この他、周辺では沼田市土塔原遺跡群戸神諏訪遺跡（戸神諏訪遺跡は関越自動車道建設から工業団地造成に伴う発掘調査など4次にわたる発掘調査が行われており、市教育委員会ではこれらを総称して土塔原遺跡群と称している。以後「戸神諏訪」と略す）から1点出土例が見られるだけであるが、三峰山西麓のみなみ町（旧月夜野町）後田遺跡や三峰神社裏遺跡、大友館址遺跡では大規模な石器製作工房が調査されている。

縄文時代 川場村内で門前橋詰遺跡や内出遺跡、生品西浦遺跡で遺構・遺物が検出・出土している。門前橋詰遺跡では前期の堅穴建物1軒が調査されている。内出遺跡では落し穴が1基調査されている。生品西浦遺跡からは早期縄が鳥台式土器や前期諸磯式土器を伴う土坑や多数の落し穴が検出されている。また、薄根川右岸、戸神山麓では奈良原遺跡や岡谷十二遺跡で前期の集落、内出遺跡の南に位置する沼田市（旧白沢村）寺谷遺跡では中期の集落が調査されている。

弥生時代 川場村内でも多くの遺跡が存在しており、集落の調査も行われている。門前橋詰遺跡や外海戸遺跡で後期の堅穴建物が調査されている他、生品西浦遺跡J区や田沢川左岸の高野原遺跡では集落が調査されている。この他、立岩では中期の山草荷式土器、門前では渋川市有馬遺跡から出土した人形土器

と同様なものが出土している。また、沼田市戸神諏訪遺跡では後期構式の大規模な集落が検出されている。

古墳時代 この時期集落は弥生時代から継続する前期の集落は外海戸遺跡や戸神諏訪遺跡などで確認されているが、中期の集落は寺谷遺跡で堅穴建物が3軒、生品西浦遺跡で堅穴建物が4軒検出されているだけで弥生時代から古墳時代前期の集落に比べるとほとんど確認されていない状況である。しかし、後期6世紀代以降の集落は生品西浦遺跡や寺谷遺跡、沼田市石黒遺跡などでややまとまった軒数の堅穴建物が検出されているが、三峰山西麓のみなみ町後田遺跡や師B遺跡に比べると検出されている堅穴建物の軒数も少ない。また、生産域は石黒遺跡でHr-FP層下から水田跡が検出されている。Hr-FP層下木田にはこの他に沼田市下川田平井遺跡、昭和村軍原Ⅱ遺跡、糸井太夫遺跡などで検出されている。

川場村内の古墳は「上毛古墳総覧」によると85基が確認され、その後の「川場村の歴史と文化」では95基とされている。これらの古墳は生品34基、天神24基、谷地14基と生品と天神に大半が存在する。現在、天神では圃場整備が進み古墳の存在は確認できないが、生品では段丘崖に近いところに数基が残っている。これらの古墳はすべて小規模な横穴石室をもつ円墳である。また、古墳は集落と同様に前期、中期のものは確認されていない。発掘調査は生品西浦遺跡で5基の古墳で行われており、大刀や鎌、鍔、環状鏡板付髷、紋具などの馬具などが出土している。田沢川左岸の高野原遺跡ではこの付近で数少ないHr-FP降下前の古墳が調査されているが、主体部はすでに削平された状態であった。周辺では薄根川の対岸に位置する沼田市秋塚古墳群で10基の古墳が調査されている。秋塚古墳群も7世紀代の小規模な横穴石室をもつ円墳で大刀や馬具の他に銀象嵌が裝飾された大刀鐔や大刀鞘尻金具が出土している。薄根川のやや下流右岸には60基ほどが確認されている奈良古墳群が存在する。奈良古墳群では史跡整備のための発掘調査が行われている。この古墳群も7世紀代の

II 遺跡地の環境

1表 周辺の調査遺跡概要

遺跡NO.	遺跡名 (所在地)	調査の内容	文献NO.
1	生品西遺跡 (利根郡川場村大字生品)	本遺跡の南側に位置し、薄根川左岸中位・上位河段段丘上に立地する。縄文時代は落し穴1ヶ所、弥生時代は竪穴建物1軒、古墳時代は中期から後期にかけての集落と終末期の落し穴6基、奈良平安時代の集落、中世近世は屋敷跡、墓坑を抽出。古墳からは副葬品に大刀、鉄鏝、密器などの馬具が出土している。	1
2	門前橋遺跡 (利根郡川場村大字門前)	薄根川の支流、溝又川と桜川に挟まれた平地上の微高地に立地する。縄文時代前期遺跡の竪穴建物1軒と弥生時代後期の竪穴建物2軒、平安時代の溝1本を抽出。出土遺物には縄文時代前期土器、弥生土器、「葦」と墨書された須恵器がある。	2
3	外野上遺跡 (利根郡川場村大字門前)	薄根川の支流、溝又川と桜川に挟まれた平地上の微高地、門前橋遺跡の南東200mに立地する。弥生時代後期の竪穴建物1軒と古墳時代前期の竪穴建物1軒、平安時代の竪穴建物1軒を抽出。出土遺物には弥生土器がある。	2
4	内出遺跡 (利根郡川場村大字萩家)	南乞山西麓の小規模な扇状地に立地する。検出された遺構は落し穴、土壇など、出土した遺物は縄文時代中期の土器片、石器、土師器などがある。	3
5	高野原遺跡 (利根郡川場村大字生品・沼田市横塚町)	田沢川左岸の河岸段丘面に立地する。弥生時代後期の集落と古墳、平安時代の墓坑を抽出。弥生時代の集落は竪穴住居12軒を抽出し、7軒を調査、古墳は4基を調査。そのうち2基は6C代のもので周縁内にHr-FPが環状、主体部は造成によって消失。隣接する古墳からは方頭大刀が出土している。	2
6	寺谷遺跡 (沼田市白沢村古語文)	南乞山西麓の小規模な扇状地に立地する。調査は1980年と2001年に実施されている。縄文時代中期、弥生時代中期・後期、古墳時代中期、平安時代の集落を抽出。なかでも弥生時代の竪穴住居からは板状瓦が出土。古墳時代中期の石製模造品を3,000点以上使用した祭祀が抽出され注目されている。	4・5
7	秋塚古墳群 (沼田市秋塚町)	薄根川右岸の河岸段丘面に立地する。1990年、1991年、1993年にわたり4回12基を発掘調査している。調査の結果、7C前時代の終末期古墳と判明。出土遺物には大刀、鏝、馬具、須恵器などがあるが、中でも3号墳からは銀象嵌が施された朝冠金具が出土。	6・7・8
8	奈良古墳群 (沼田市奈良町)	薄根川左岸の河岸段丘面に立地する。1965年群馬大学、1999年に沼田市教育委員会によって発掘調査が行われた。古墳群は東西400m、南北200mの範囲に60基が確認されていた。古墳の規模は最大でも径20mで大部分は7m～10m前後である。構築の時期は7C代で石室は自然石乱石積の横穴石室である。石室には土の字状をした希なものも存在する。出土遺物には金銅製の馬具を初め大刀、鏝、須恵器などがある。	9 10 11
9	奈良田向遺跡 (沼田市奈良町)	免知川右岸の上位河段段丘面に立地する。弥生時代後期の竪穴住居3軒と平安時代の竪穴住居13軒などを抽出。平安時代の住居の中には小鍛冶所や鑄造口・鉄造を抽出。出土したものがあ。遺物には土器の他に熊鷹などの鉄製器が注目される。	12
10	奈良原遺跡 (沼田市奈良町)	免知川右岸の上位河段段丘面に立地する。縄文時代前期の竪穴住居8軒、弥生時代後期の竪穴住居7軒、平安時代の竪穴住居2軒と中世の塚、墓坑を抽出。出土遺物には土器、石器、土師器、須恵器、五輪塔などがある。	13
11	上光寺遺跡 (沼田市下免知町)	免知川右岸の上位河段段丘面に立地する。縄文時代後期の柄鏡形彩石住居1軒、後期の板石遺構2基、土坑14基、炉3基、埋設土器3基と弥生時代の竪穴住居2軒、平安時代の掘立柱建物2棟、中世の竪穴遺構、墓坑、土坑、溝、欄状遺構等を抽出した。出土遺物には縄文時代後期の土器、石器と渡来銭などがある。	14
12	鎌倉台遺跡 (沼田市高橋塚町)	薄根川左岸の沼田台地上の北側縁辺に立地する。縄文時代中期の落し穴3基、土坑14基を抽出。	15
13	鎌倉遺跡 (沼田市岡谷町鎌倉)	薄根川左岸の沼田台地の北側縁辺、標高446mに立地する。また、遺跡地の南側には水田として利用されている谷地が存在している。弥生時代後期の竪穴住居9軒を抽出。出土遺物には弥生土器の他、縄文時代中期阿玉台式、加賀利E3式などの縄文土器がある。	16
14	清水遺跡 (沼田市高橋塚町清水)	薄根川左岸の沼田台地の北側縁辺、標高450mに立地する。古墳時代前期の竪穴住居を1軒抽出。出土遺物には土師器、密、台形器、小型変等がある。土師器には弥生時代後期の様相を呈するものがみられる。	11
15	下宿遺跡 (沼田市横塚町下宿)	薄根川左岸の沼田台地の北側縁辺、標高460～464mに立地する。縄文時代の落し穴4基、土坑9基と平安時代の掘立柱建物4棟を抽出。掘立柱建物は1×1、1×2間と簡素な作りである。出土遺物は縄文土器と古墳時代の土師器がある。	17
16	追鳥古墳群 (沼田市上沼項町字追鳥)	片高川右岸の中位河段段丘面の傾斜地に立地する。標高は392m前後、河床からの比高差は約90mである。古墳1基を発掘調査している。古墳はHr-FP層上に構築されている径13mの円墳、石室は自然石乱石積の横穴式兩廂型、全長は16.12m、室長13.52m、幅2.36mを測る。出土遺物には金環、須恵器高杯がある。構築年代は出土した須恵器が6世紀後半時代の様相を呈していることから6世紀末から7世紀初頭とされている。	18
17	下清水遺跡 (沼田市下久屋町字下清水)	片高川右岸の中位河段段丘面、標高391mに立地する。縄文時代中期加賀利E式期の柄鏡形住居1軒、竪穴住居3軒抽出。出土遺物には中期加賀利E式の土器と石器、土製耳飾り(耳栓)と古墳時代の土製玉が有る。	19
18	上久屋橋場遺跡 (沼田市上久屋町字橋場)	片高川右岸の下位河段段丘面、標高392～394mに立地する。周囲には利南古墳群が存在している。弥生時代後期竪穴住居4基と近世の墓坑1基を抽出。古墳と想定された高まりを調査したが、古墳である確証は得られていない。出土遺物には弥生土器、天保通宝、おせりなどがある。	19・20
19	馬場遺跡 (沼田市上久屋町字馬場)	片高川右岸の中位河段段丘面、標高410mに立地する。中世の塚1基、溝1基、土坑6基と時期不詳の竪穴遺構を3基抽出。出土遺物には縄文時代の土器、石器、中世の石臼、陶器、四石がある。	
20	大友館跡 (川場村大字谷地中取)	薄根川右岸の台地上に立地する。大伴氏にかかわる館跡でかつては四方に土塁がめぐっていたとされる。発掘調査では土塁と堀を抽出。出土遺物には陶器、磁石、キセルなどがある。	21



5図 周辺の調査遺跡区(1/25,000)

II 遺跡地の環境

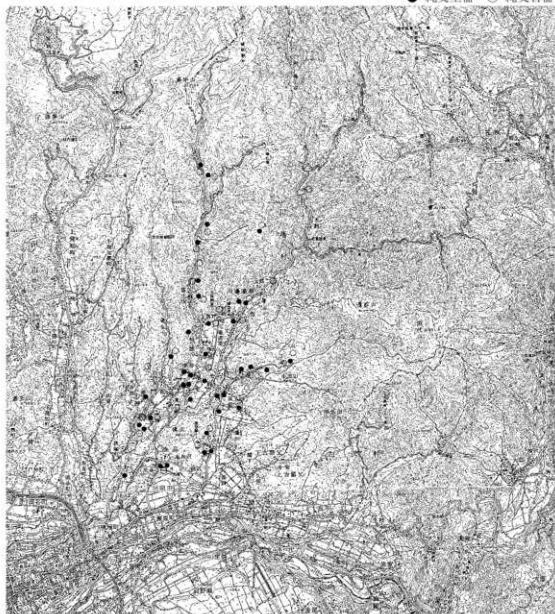
小規模な横穴式石室をもつ円墳であるが、10号古墳と呼称されている古墳は石室が玄室右壁面にT字状に側室を付設したきわめて類例が少ない古墳が存在している。出土遺物には大刀、鎌、馬具、須恵器などがあるが、その中でも土地所有者によって保管されている馬具一式は非常に良好な状態のものである。

奈良・平安時代 川場村村内では生品西浦遺跡で竪穴建物5軒が検出されている。また、県道部分の調査でも多くの竪穴建物や土坑が検出されている。この他、寺谷遺跡や外海戸遺跡で竪穴建物、田沢川左岸の高野原遺跡では墓坑が検出されている。この時

代は評里、郡郷によって地方を区分しているが、遺跡地が所在する生品はその地名から「和名類聚抄」に記載されている利根郡男信郷に比定されている。古代利根郡男信郷は古墳群や集落遺跡の分布からその領域は西は発知川付近、南は沼田台地を境とするみられる。

中世 村内では門前に鎌倉時代から室町時代の守護、大名となった豊後大友氏と関わりのある館が存在している他、門前には中蔵門月によって延元元(1336)年に開山した吉祥寺が現存する。

● 縄文土器 ○ 縄文石器

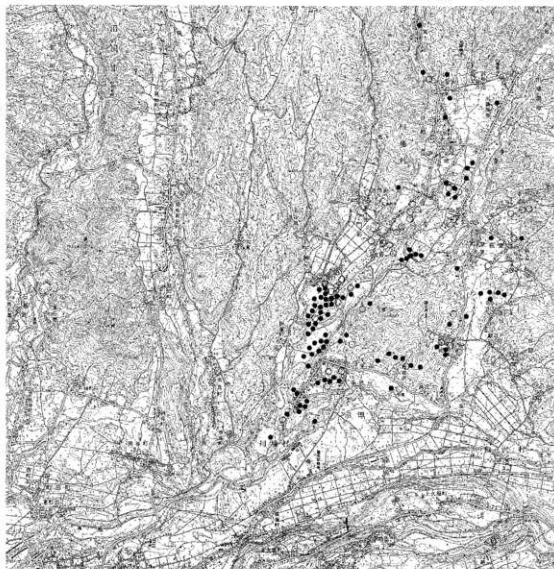


6図 川場村の縄文土器・石器分布図(1/100,000)

周辺調査遺跡一覧

- 1 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団「生品西浦遺跡～終末期・馬具出土古墳の調査～、一村道生品下り線埋蔵文化財発掘調査報告書～」2005
- 2 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団「門前橋詰・外海戸遺跡 高野原遺跡～公共開発関連出土品等整理報告書～」1989
- 3 群馬県利根郡川場村教育委員会「[内出遺跡] 発掘調査報告書」1981
- 4 群馬県利根郡白沢村教育委員会「[寺谷遺跡] 発掘調査報告書(因取編)」1981
- 5 白沢村教育委員会「寺谷遺跡～農用地総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」2003
- 6 沼田市教育委員会「秋塚古墳群Ⅰ～平成2年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1991
- 7 沼田市教育委員会「秋塚古墳群Ⅱ～平成3年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1992
- 8 沼田市教育委員会「秋塚古墳群Ⅲ～平成5年度土地改良総合整備事業秋塚地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1994
- 9 沼田市教育委員会「奈良古墳群～平成11年度県営中山間地域総合整備事業みくに地区奈良南部区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」2001
- 10 沼田市教育委員会「奈良古墳群 確認調査～平成16・17年度保存目的の埋蔵文化財発掘調査概報～」2007
- 11 沼田市「沼田市史 資料編Ⅰ 原始古代・中世」
- 12 沼田市教育委員会「奈良地区道路群(奈良田向遺跡)～土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要～」1990
- 13 沼田市教育委員会「奈良地区道路群(奈良原遺跡)～土地改良総合整備事業奈良地区に係る埋蔵文化財発掘調査の概要～」1991
- 14 沼田市教育委員会「免知南部知己遺跡群上光寺遺跡～平成7年度農用地総合整備事業免知南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1996
- 15 沼田市教育委員会「鎌倉台遺跡～水資源開発公団沼田総合管理用宿舍新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1990
- 16 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団「師道跡・鎌倉遺跡～関越自動車道(新岡線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第28集～」1989
- 17 沼田市教育委員会「下宿浦遺跡～地方特定道路整備事業桜ヶ丘横塚線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1996
- 18 沼田市教育委員会「追墓古墳(田利南村48号古墳)～利根郡沼田市広域整備(めまた聖苑)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1989
- 19 沼田市教育委員会「上久屋地区遺跡群下清水遺跡・馬場遺跡・横場遺跡・十二反遺跡～県営緊急傾地帯総合整備事業上久屋地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1993
- 20 沼田市教育委員会「上久屋傾場遺跡～有限会社沼田物産土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」1989
- 21 群馬県利根郡川場村教育委員会「大友館跡発掘調査報告書」1983

● 古墳 ○ 土器、石器



7 図 川場村の古墳と弥生土器・土師器分布図(1/50,000)

III 調査の方法

1. 調査区の設定

調査にあたってグリッドの設定は生品西浦遺跡と同様に国家座標IX系（世界測地系）を用いて10mを基準とし、適時5m、1mなどを併用して対応した。各グリッドの名称はX軸、Y軸とも座標値の下3桁を表記することとした。一例としてX=75,560~75,570、Y=-66,730~-66,740の10m四方は560-730と表記した。また、範囲を狭めたグリッドの表記は560~565-570~575などとした。

2. 調査の手順

調査は古墳や壇のように地上に残る遺構では現況の状態を1/100の現況図の作成を行ってから掘削等の作業に着手した。A区壇遺構は頂部で交差するようにトレンチを設定して盛り土の状態を観察し、堆積土の除去を行った後に1/20で平面図と断面図を測量した。A区の土坑などは埋没状態、堆積状態を観察するため半裁状態で掘削を行い、断面観察、写真撮影、測量を行い、残りを掘削後埋没状態、平面状態の測量を行った。なお、壇の詳細図、調査区の全体図等は測量業者に委託した。

B区古墳は耕作等で寄せ集められた礫を除去した結果、墳丘の盛り土はすべて除去されていたため、石室および表込めの礫だけの状態であった。そのため、この状態の詳細図を作成し、原位置石室中央部で埋没状態が観察できるように半裁状態で掘削を行った。

竪穴建物、土坑などは一部IV層上面で確認し、重複する遺構について新旧関係を確認するため一部トレンチによる調査を行った。そして埋没状態、堆積状態を観察するため土層観察用のベルトを残すか、半裁状態で掘削を行い、断面観察、写真撮影、測量を行い、残りを掘削後平面状態の測量を行った。竪

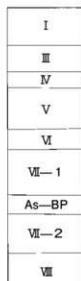
穴建物カマドは原則十字に土層観察用のベルトを設定して調査を行った。なお、遺物出土状態図は作業員によって平板測量、その他詳細図、調査区の全体図等は測量業者に委託した。

3. 遺跡地の基本層序

基本土層は生品西浦遺跡（2005年刊行）と同様である。なお、A区は傾斜地のため表土がほとんど流出して黒褐色土が10cmほど堆積しているだけでほとんど残っていない状態であった。B区は中位河岸段丘面に相当するが山側の東半ではIV層Hr-FPの堆積が確認された。

確認された層位は以下のとおりである。

- I層 黒褐色土 耕作土、Hr-FPを多量に含む。
 - II層 生品西浦遺跡では浅間柏川軽石の堆積が確認できる箇所があるが、本遺跡では確認できなかった。
 - III層 黒褐色土 やや褐色が強い、Hr-FPを30%ほど含む。
 - IV層 Hr-FP、なお、B区西半では堆積が確認できなかった。
 - V層 黒色土 含有物はほとんどみられない。
 - VI層 ローム漸移層
 - VII層 ローム
 - VIII層 径10~20cmの円礫からなる礫層
- なお、B区西半では段丘崖に近いためいわゆる表土の堆積も少なく、V層下では薄根川の元河床とみられる礫層が表れる。



8図 遺跡地土層堆積模式図

Ⅳ 検出した遺構と出土した遺物

1. 概要

遺構の検出はA区ではⅡ層からⅤ層にかけての層位が存在していないためⅥ層、Ⅶ層で行った。B区はⅣ層Hr-FPが残存していたのでこの層位上面を目安に行ったが、西側ではA区と同様に表土層が流出しており、Ⅴ層からⅦ層にかけてもごくわずしか確認することができないため隣層での遺構確認を行った。

A区では盛り土されていた宮を祭る壇と土坑16基を検出した。壇は当初、古墳の墳丘ではないかと想

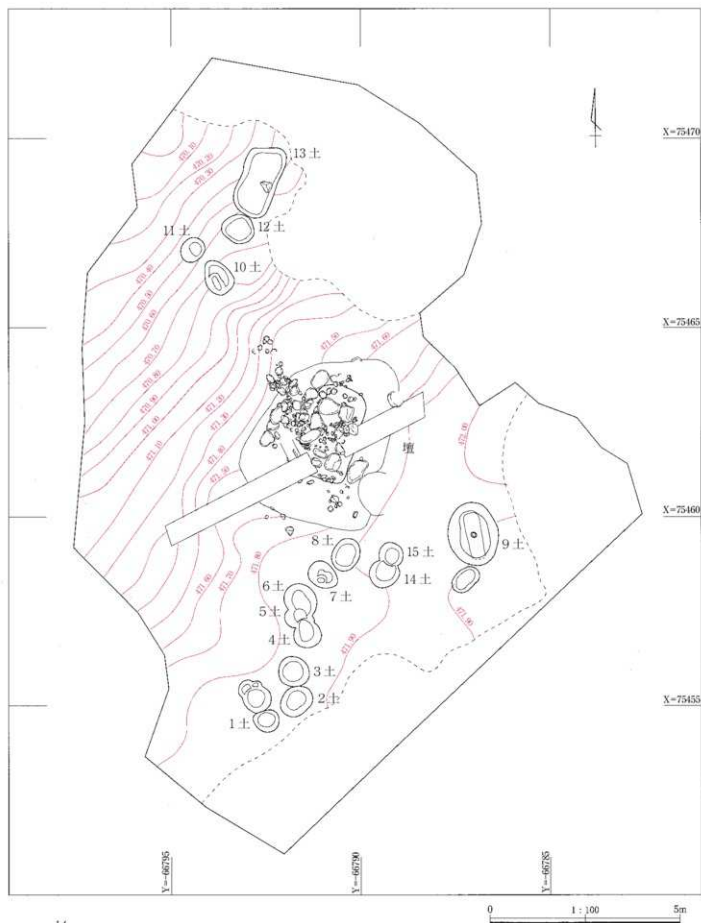
定されたが、試掘などの結果、上面に配置された礎が方形にならぶことや配置された礎から近世陶磁器などが出土したことなどから「壇」と判断した。土坑は縄文時代の落し穴1基の他は出土遺物がないため明確にできない点もあるが埋没土などから中近世に比定される。

B区では古墳時代の古墳と小石棺墓各1基、平安時代の竪穴建物5軒、土坑3基などを検出した。なお、B区1号古墳は上毛古墳総覽川場村57号古墳、隣の栗林に所在する古墳は上毛古墳総覽川場村58号古墳に該当する。



9図 B区発掘調査前現況図

IV 検出した遺構と出土した遺物





11図 B区発掘調査全体図

0 1:100 5m

土は土坑の略

2. 縄文時代～弥生時代

(1) 土坑・落とし穴

A区9号土坑

A区東南部、X=75.458～75.460-Y=-66.786～-66.787に位置する。本遺構の性格は形態や底面に小穴を有することから狩猟用の落とし穴と判断される。

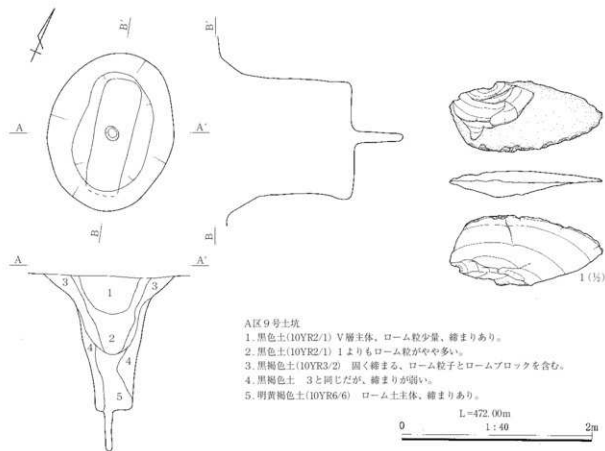
他遺構との重複関係はA区壇と僅かに重複するが、A区壇の崩落土が本遺構の一部に覆う程度であった。新旧関係は当然本遺構のほうが古い。確認面での平面形態は楕円形、底面は短辺が弧状を呈するが長辺の東辺と西辺はほぼ並行し直線を呈する形状で、ほぼ中央に逆茂木を差し込んだ小穴を検出した。断面

形態は上部より3分の1ほどのところに稜をもつ逆台形を呈す。規模は確認面で長径1.70m、短径1.34m、底面までの深度1.49m、底面が長径1.26m、短径0.40m、底面小穴が径0.16m、深度0.43mを測る。断面形態は短径部分が下部になるにしたがい細くなる逆台形状、長径部分は箱状を呈するが南辺下部は壁面がやや掘り込まれている。

埋没状態は壁際はⅦ層の崩落、中央部はⅤ層の流れ込みが観察されたことから自然埋没と考えられる。

遺物は1の削器がⅦ層中B層下から出土しただけである。

本遺構の時期は出土した遺物から縄文時代であることはわかるが、詳細な時期の比定はできない。



A区9号土坑

NO.	種類	形態	出土位置	残存率	計測値	摘要
1	石器	削器	壁際	完形	長 3.7 幅 8.1 厚 1.4 重 28.1	頁岩、PL16

12図 A区9号土坑平面図・断面図・出土遺物

IV 検出した遺構と出土した遺物

(2) 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物や遺構から出土しているが遺構の年代と相離がみられる遺物を掲載している。1～3、5～8は縄文時代の土器と石器、縄文土器は3点とも前期諸磯a式期のものである。4はB区確認面から出土した弥生土器である。4の弥生土器はIV層上面からの出土であるためB区の上位に立地する生品西浦遺跡J区から落下したものとみられる。



13図 縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物図

縄文時代～弥生時代遺構外出土遺物

NO. PL	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	摘要
1	縄文土器 深鉢	B区5号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/黄橙	1段4条、R.L横位。	講議a式
2	縄文土器 深鉢	B区5号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/赤褐	R.L横位、(2段時の摺りが弱いため節の傾斜が強い)。	講議a式
3	縄文土器 深鉢	B区5号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/黒褐	R.L横位。	講議a式
4	弥生土器 甕	B区2号竪穴建物 胴部片		細砂粒/良好/黄橙	胴部上に波状文。	後期博式
NO.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	摘要
5	石部	煎器	B区	ほぼ完形	長111 幅4.8 厚1.4 重70.5	安山岩、PL16
6	石部	打製石斧	B区1号竪穴建物	上半欠損	長72 幅5.2 厚2.2 重62.3	安山岩、PL16
7	石部	打製石斧	B区1号古墳上部	ほぼ完形	長131 幅5.7 厚1.8 重190.5	片岩、PL16
8	石部	磨製石斧	A区	上半欠損	長102 幅7.5 厚3.1 重271.8	安山岩、PL16

3. 古墳時代

(1) 古墳・墓坑

B区1号古墳

本古墳はB区調査区の北側、X=75.558～75.570-Y=-66.725～-66.736に位置する。墳丘部は全体が調査区内に存在したが、東周堀の一部は道路下に延びている。調査前は栗林として耕作されており、石室およびその周辺付近に耕作によって出た小礫が廃棄のため集積された状態であった。

他遺構との重複関係は周堀でB区1号竪穴建物と3号竪穴建物と重複しているのが確認された。新旧関係は本古墳のほうが古い、平面での確認は埋没土が本古墳周堀、竪穴建物ともにHr-FPを多量に含む黒褐色土であるため明確ではなかったが、断面観察や竪穴建物床面などから判断した。

墳丘は耕作によってほとんど削り取られた状態であった。そして石室周囲には耕作によって出た礫が廃棄・集積された状態であった。これら礫や表土を除去するとすぐに石室の下部や石室裏込めが表れた状態で石室上部および墳丘盛土自体の残存は確認されなかった。ただし、石室東側ではわずかに残存が確認された。なお、墳丘下にはIV層Hr-FPが堆積しており、その上部はほとんど攪拌されていない状態のIII層が堆積している。墳丘にはHr-FPを取り除いた下部のV層を盛り上げているため地山と盛土を明確に区分することは困難であった。

また、墳丘に伴う葺石や根石などは全く残存していない状態であった。

周堀は羨道前部左側から墳丘東側にかけて検出されたが、西側は表土下ですぐにIII層の礫層が露出する状態のため存在したか否かも明らかでない。

周堀は東側は礫層まで達しているが、東南部はV層下部までであった。規模は東側で幅4.50m、深度0.70m、東南部で幅3.20m、深度0.30mを測る。

石室は地元の方によると戦前には開口しており石室内部へ出入りできたとのことである。しかし、現状は天井石がすべて取り除かれ、奥壁や側壁も上半部の礫がすでに消失した状態であった。天井石は周辺にも残存しておらず、側壁も一部が石室内や石室西脇に放置されていたが大部分は周囲にも残存していなかった。

石室の構造は自然石乱積両袖型横穴石室である。開口方位はS-38°-Eを指す。石室の規模は全長4.35mを測る。羨道は長さ2.24m、幅は入り口部で0.78m、奥部で0.90m、支室は長さ2.11m、幅は入り口部1.12m、中間部最大幅1.26m、奥部0.98mである。

羨道入り口と支室手前には径40～50cm、厚さ10cm前後の川原石が置かれ、その間には径5cmほどの小礫が厚さ10cmほど敷きつめられていた。支室手前は径40～50cmの川原石の上に同様な礫が積み重ねられており、当時の閉塞状態を一部残していた。

支室は明確な胴張りには至らないがわずかに彫ら

IV 検出した遺構と出土した遺物

みがみられる。羨道から見ると左袖部は10cm、右袖部は15cmの広がりがある。奥壁は幅100cm、高さ45cm、厚さ50cmの安山岩が据えられているが、本来なら同様な礫がもう一段積み重ねられ室内高も1m前後あったとみられる。側壁は奥壁側は1段しか残存していないが入り口付近では2段目まで残存していた。使用されている礫は幅60～100cm、高さ25～50cm、厚さ50～90cmほどである。石室側壁、奥壁の構築方法は左袖の奥壁より2石は横積みであるのに対して他の礫はすべて小口積みであった。

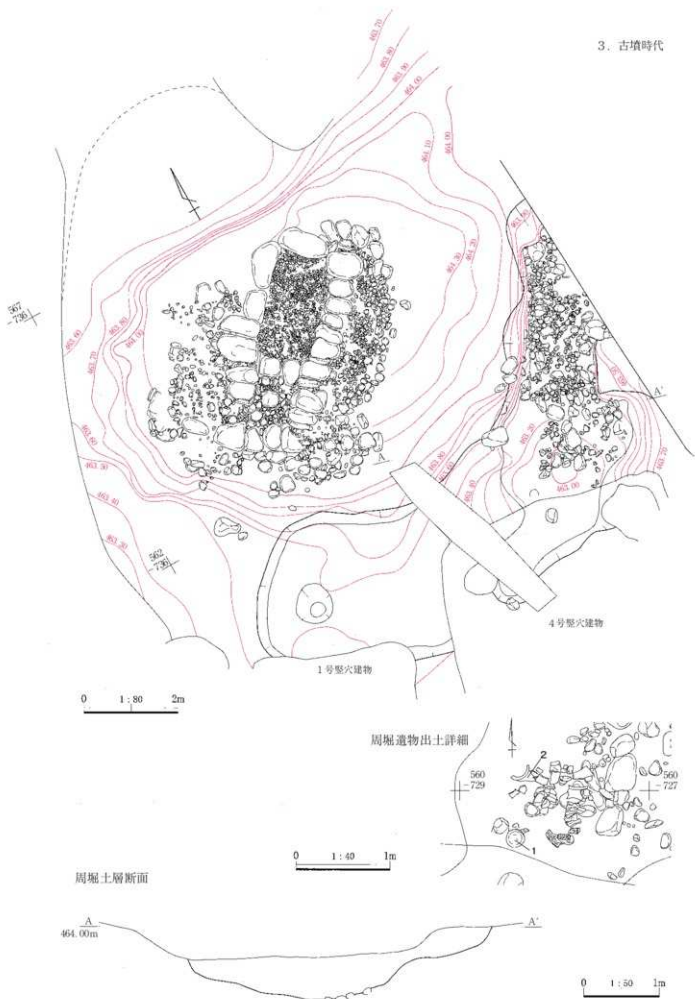
壁面に比べて床面の残存状態は良好で径5～10cmの小礫を厚さ10～15cmほど敷きつめている。奥壁から羨道にかけては緩い傾斜がみられる。下部の石室基部では鋪石面が確認された。鋪石面の範囲は石室主軸方位と同様な方位で石室主軸方向が幅方向よりやや長い長方形である。その範囲に径20～40cmの扁平な円礫を整然と敷きつめてあった。その範囲はX=75.562～75.567、Y=-66.728～-66.733で規模は軸方向が2.10m、幅1.90mであったが、17図のように石室内部から見るとやや左に寄った位置に側壁の礫が置かれた状態になる。鋪石の敷きつめにはV層の上面までIV層Hr-FPを取り除いて礫を配置している。そのため石室設置のための掘方は存在していない。

石室裏込めには5～15cmの礫を使用して壁石の周りを馬蹄形に取り囲むように積み重ねられていたと想定されるが、左袖奥寄りから奥壁にかけては欠損した状態であった。その範囲は両側とも1.0mほどで周辺部には30～40cmほどの礫が置かれていた。

出土遺物は玄室内奥壁よりから勾玉と金環、左壁より小刀と鎌、その手前に刀子、右側壁奥寄りに大刀、裏込め北東角から金環が出土している。金環は玄室奥壁と石室裏込め北東隅から出土しているが、2点とも残存状態が良好で銅製の心に金箔が貼られた可能性が高い。大刀は鐔や銅製鞘金具の一部が残っている状態であり、鞘には表裏・側面を銀象嵌による装飾が施されていた。また、周堀内からは須恵器長頸壺、甕、土師器甕と東南部底面から馬骨が1

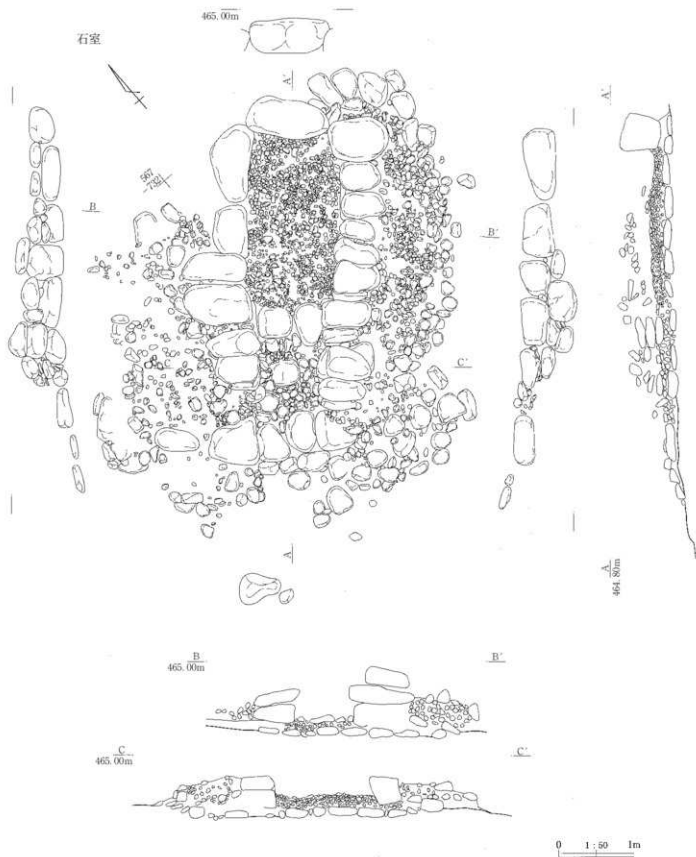
体出土している。この馬骨は底面付近からの出土で上位には須恵器残片が出土していることからこの古墳の被葬者が乗馬していた可能性が高い。

本古墳の時期はIV層Hr-FPより上位に構築されている点と周堀内から出土した須恵器などから7世紀代の終末期の古墳と考えられる。

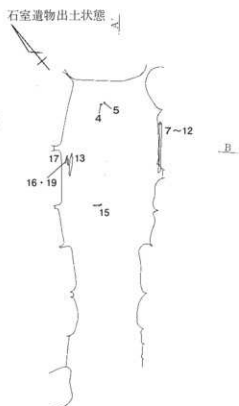


14图 B区1号古墳全体图、周堀遺物出土詳細图、周堀断面图

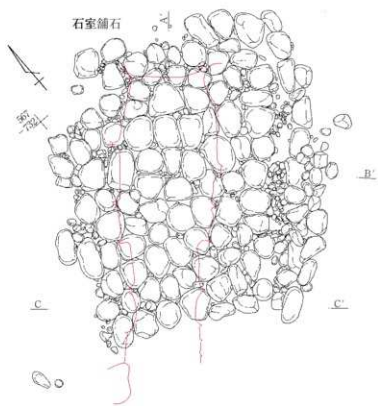
IV 検出した遺構と出土した遺物



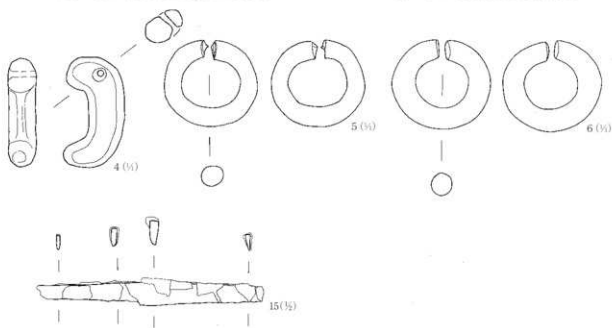
15図 B区1号古墳石室平面図、断面図、壁面図



16图 B区1号古墳石室遺物出土状態図

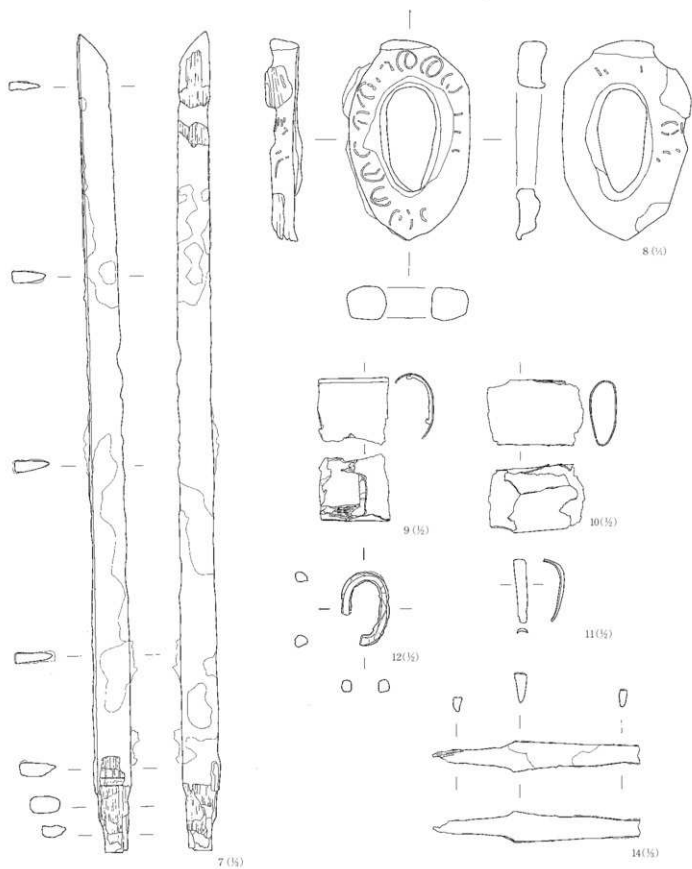


17图 B区1号古墳石室鋪石状態図

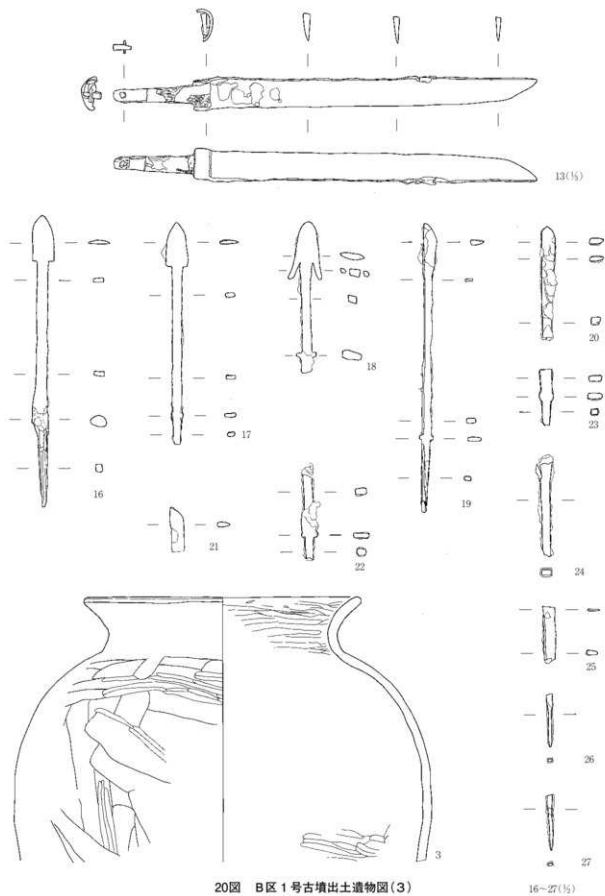


18图 B区1号古墳出土遺物図(1)

IV 検出した遺構と出土した遺物

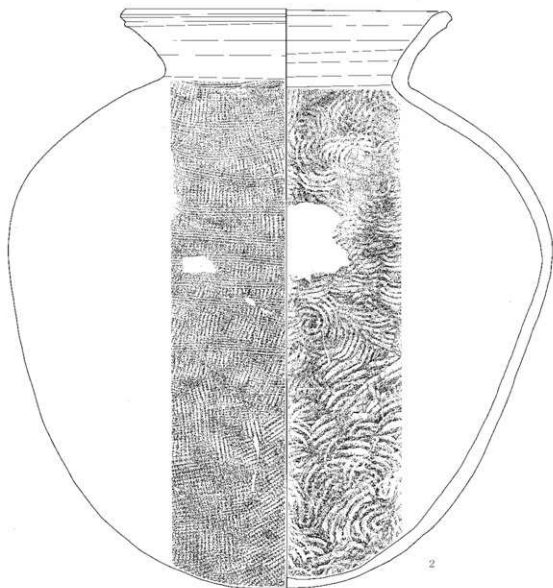
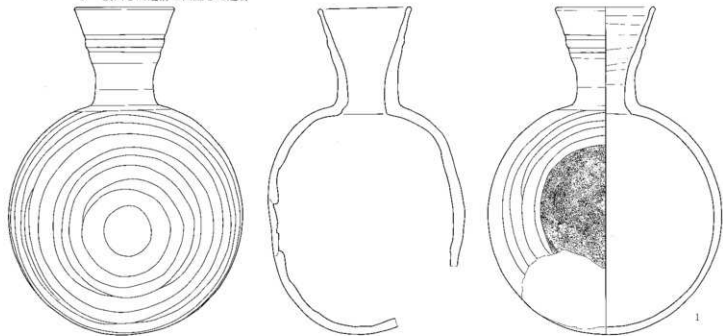


19図 B区1号古墳出土遺物図(2)



20图 B区1号古墳出土遺物图(3)

IV 検出した遺構と出土した遺物



B区1号古墳

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器	周堀	口 70 胴 18.5	粗砂粒/還元焰/灰	ロタロ整形, 回転右回りか。胴部表裏とも回転へう削り。	
16	長須恵	一部欠損	高 26.0			
2	須恵器	周堀	口 25.4	粗砂粒/還元焰/灰	ロタロ整形。胴部外面は平行叩き後カキ目、内面同心円状アテ具痕。	
16	要	底部1/2欠	高 45.8			
3	土師器	周堀	口 21.2 胴 32.6	粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部横ナテ, 胴部へう削りに部分的なへう磨き。内面口縁部へう磨き。	
16	要	口へ胴上半片				
NO.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	摘要
4	石製品	勾玉	玄室奥壁より	完形	長 2.9 幅 1.5 厚 0.7 孔 0.15	瑪瑙, PL17
5	金属製品	金環	玄室奥壁より	完形	径 2.5×2.3 厚 0.6	金剛製, PL17
6	金属製品	金環	玄室裏込北東部	完形	径 2.6×2.4 厚 0.6	金剛製, PL17
7	鉄器	大刀	玄室右側壁際	柄端部欠損	長 64.3 刃部長 56.8 幅 3.0 厚 1.3	柄, 鞘の木質残る
8	金属製品	鐙	玄室右側壁際	ほぼ完形	長 5.4 幅 3.2 厚 0.9 孔径 2.7×1.3	表裏, 側面に象眼
9	金属製品	鞘金具	玄室右側壁際	破片	長 (3.2) 幅 (3.0), (2.0) 厚 0.05	鋼製品, 背より, PL17
10	金属製品	鞘金具	玄室右側壁際	破片	長 (4.9) 幅 3.4, 1.35 厚 0.05	鋼製品
11	金属製品	鞘金具	玄室右側壁際	破片	長 (3.35) 幅 (0.55) 厚 0.06	
12	鉄器	鞘金具	玄室右側壁際	3/4		PL17
13	鉄器	小刀	玄室左側壁際	ほぼ完形	長 33.3 刃部長 26.0 柄長 7.3 幅 2.5 厚 1.4	PL17
14	鉄器	小刀	玄室右側壁際	刃部1/2欠損	長 16.3 柄長 6.4 幅 2.4 厚 0.9	PL17
15	鉄器	刀子	玄室中央	刃部1/2欠損	長 11.9 柄長 5.3 幅 1.5 厚 0.7	PL17
16	鉄器	鎌	玄室床面	完形	長 15.5 刃長 2.4 柄長 9.0 茎長 4.1	PL17
17	鉄器	鎌	玄室床面	茎部欠損	長(11.8) 刃長 2.4 柄長 8.1 茎長 1.5	PL17
18	鉄器	鎌	玄室埋没土	茎部欠損	長 (8.0) 刃長 2.1 柄長 5.0	PL17
19	鉄器	鎌	玄室床面	完形	長 15.3 刃長 0.8 柄長 10.3 茎長 4.2	PL17
20	鉄器	鎌	玄室埋没土	刃部下半欠損	長 (6.05) 刃長 0.8 幅 0.75 厚 0.4	PL17
21	鉄器	鎌	玄室埋没土	刃部片	長 (2.4) 幅 0.7 厚 0.3	
22	鉄器	鎌	玄室床面	茎の一部	長 (5.2) 幅 0.75 厚 0.35	PL17
23	鉄器	鎌	玄室埋没土	茎の一部	長 (3.5) 幅 0.8 厚 0.3	PL17
24	鉄器	鎌	玄室埋没土	茎の一部	長 (6.4) 幅 0.5 厚 0.3	PL17
25	鉄器	鎌	玄室埋没土	茎の一部	長 (3.0) 幅 0.7 厚 0.4	
26	鉄器	鎌	玄室埋没土	茎端部	長 (3.0) 幅 0.4 厚 0.25	PL17
27	鉄器	鎌	玄室床面	茎の一部	長 (2.8) 幅 0.35 厚 0.25	PL17

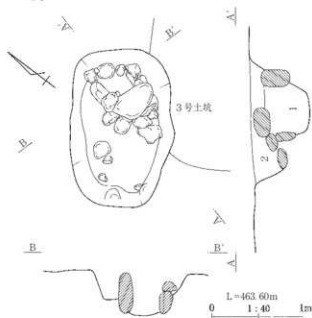
B区4号土坑

本土坑は検出した状況から小石棺墓と考えられる。位置は調査区の南部、X = 75.552・75.553 - Y = -66.740 ~ -66.738である。確認時には北側の蓋石が耕作によって欠損した状態であったが残存状態良好であった。他遺構との重複関係は西側側で3号土坑と重複する。新旧関係は本遺構のほうが古い。残存状態は一部耕作によって蓋石が失われているが比較的的良好である。平面形態は楕円形を呈するが、西側のテラス状部分は本遺構に伴うか否かは確認できなかった。石棺墓本体の規模は長軸0.85m、短軸0.60m、深度0.70mを測る。

本体側面には長さ25~40cm、幅15~30cm、厚さ7~12cmのやや扁平な礫を立て、その上に長さ50cm、幅35cm、厚さ17cm前後の礫を蓋として置いてあった。埋没土はIV層Hr-FPを含め黒色土で埋没しており、埋没状態については不確定である。内部からは遺物

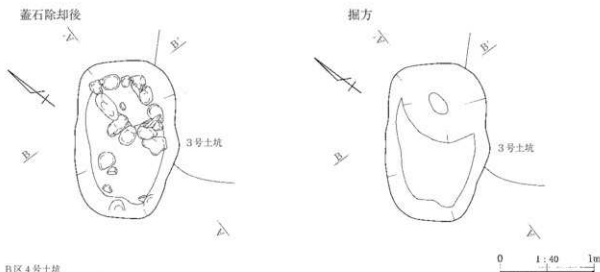
などの出土はみられなかった。

本遺構の時期は形態から古墳時代後期に比定される。



22図 B区4号土坑平面図・断面図(1)

IV 検出した遺構と出土した遺物



B区4号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2) III層とV層の混合土、φ0.5cmのHr-FPとφ5~10cmのブロックを20%含む。
2. 黒色土(10YR2/1) III層とV層の混合土、φ0.5cmのHr-FPをやや多く(40%程度)含む。

23図 B区4号土坑平面図・断面図(2)

4. 平安時代

(1) 堅穴建物

B区1号堅穴建物

本遺構はB区のほぼ中央、 $X = 75.560 \sim 75.557 - Y = -66.732 \sim -66.737$ に位置する。他遺構との重複関係は西辺でB区5号堅穴建物、北辺でB区1号古墳周堀と重複する。新旧関係は本遺構のほうがB区5号堅穴建物より古く、B区1号古墳周堀より新しい。残存状態はB区4号堅穴建物と重複する僅かな部分を欠くが他部分は良好である。本遺構の掘削は東辺のカマド南側から南辺、北辺の中段まで棚状に段を有している。そのため平面形態は棚状を含めると南辺西側に張出しを有する長方形、棚状の内側では南辺が北辺に比べてやや短いほぼ長方形を呈する。規模は棚状を含めると長軸4.65m、短軸4.10m、内側で長軸3.97m、短軸3.47m、外側の各辺長が北辺3.40m、東辺4.80m、南辺3.70m、西辺4.50m内側の辺長が東辺4.02m、南辺2.95m、西辺3.70m、床面積は9.22㎡を測る。壁高は確認面から28~54cmである。主軸方位はN-119°-Eを指す。

内部施設は柱穴、貯蔵穴、周溝などは検出されなかったが、前記のように東辺のカマド南側から南辺、北辺の中段まで棚状に段を有している。この棚状の

段が棚であるかIV層Hr-FPの崩落によるものなのかは断面観察では判断が難しかったが、棚面の状態が比較的平坦であるため棚の可能性が高い。棚の幅は東辺50cm、南辺の東側23cm前後、西側50cm、西辺5cmほどである。

床面は黒色土を10~20cmほど埋戻してその上に壁際30~100cm内側に3~5cmほどローム土と黒色土を混ぜ合わせた土を入れて踏み固めている。

カマドは東辺のほぼ中央に構築されている。残存状態は燃焼部天井部が堅穴建物廃棄時に壊されているが、その部分以外は良好な状態であった。規模は全長1.35m、幅1.40m、燃焼部全長0.75m、幅0.50mである。袖と煙道側面には径15~30cmの垂角礫を多く使用して補強されていた。煙道は緩い傾斜をもちながら壁外に延びる。

掘方は床面より10~20cmほど下まで掘りこまれているが、床下土坑などの施設もなく掘方面もほとんど凹凸はみられない。

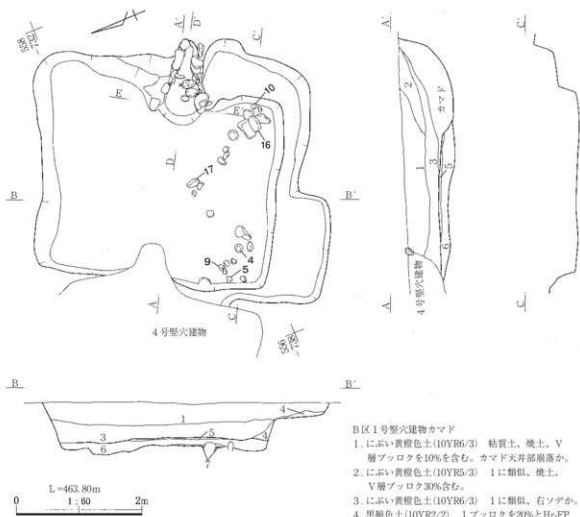
埋没状態は土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没である。

遺物は土師器、須恵器、灰軸陶器、石器などが出土している。その出土は東南角と西南角付近にややまとまった出土がみられた。その中でも9の須恵器輪はカマドと西南角床面より+18cmから出土したも

のが接合した。この他の遺物も床面よりやや高い位置から出土しているが、10の須恵器碗は棚から崩落した可能性も窺える。

廃棄状態

本遺構の存続年代は出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



24図 B区1号型穴建物平面図・断面図

B区1号型穴建物

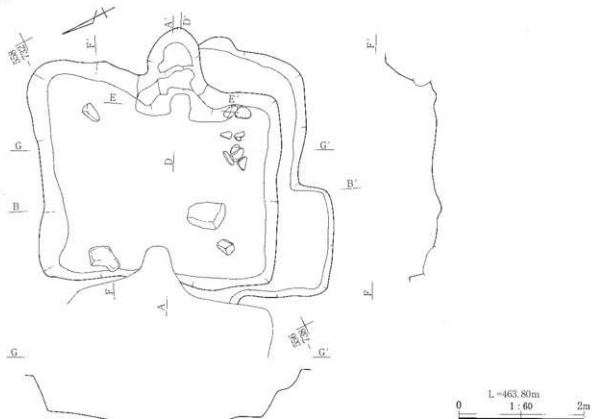
1. 黒褐色土(10YR3/1)Hr-PP、ローム粒を含む、締まりと粘性あり。
2. 褐色土(10YR4/4) ローム粒多い、締まりと粘性あり。
3. 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒と焼土粒を含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1)3よりも焼土粒が多い。
5. にぶい黄褐色(10YR7/4)土と黒褐色土(10YR3/1)の混合、締まりよく固い、粘床土。
6. 黒褐色土(10YR3/1)Hr-PP、小礫(φ1~5cm)含む。
7. 黒褐色土(10YR3/3)Hr-PP、小礫(φ1~5cm)を微量含む。

B区1号型穴建物カマド

1. にぶい黄褐色土(10YR6/3) 粘質土、焼土、V層ブロックを10%含む。カマド天井部崩落か。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 1に類似、焼土、V層ブロック30%含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR6/3) 1に類似、右ソデか。
4. 黒褐色土(10YR2/2) 1ブロックを20%とHr-PPを5%含む。
5. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒5%、Hr-PPを3%含む。
6. 焼土ブロック。
7. 黒色土(10YR2/1) V層と同様、V層の流れ込み。
8. にぶい黄褐色土(10YR6/3) 天井、粘土、焼土粒3%含む。
9. にぶい黄褐色土(10YR6/3) 粘土、左ソデ。
10. 黒色土(10YR2/1) V層と同様。
11. 暗褐色土(10YR3/3) Hr-PP、焼土の小ブロックを3%含む、粘質土。
12. 浅黄色土(2.5Y7/3)と黒色土(10YR2/1)の混合、粘床土、よく締まり固い。
13. 黒褐色土(10YR3/1) Hr-PP、礫(φ5~20cm)含む。
14. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土と浅黄色土(2.5Y7/3)を含む。

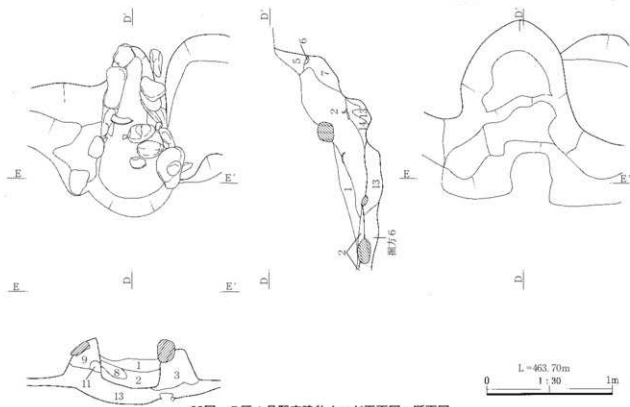
IV 検出した遺構と出土した遺物

掘方

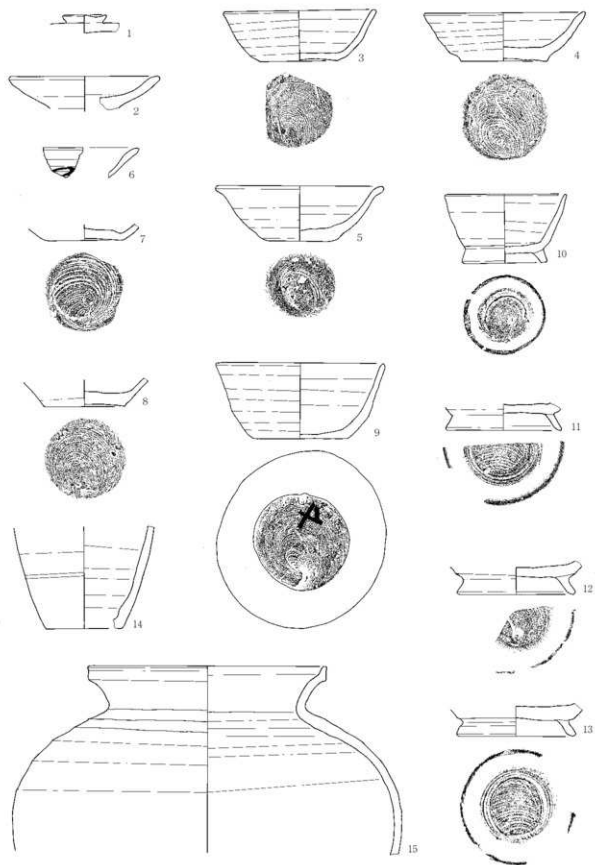


25図 B区1号竪穴建物掘方平面図・断面図

カマド



26図 B区1号竪穴建物カマド平面図・断面図

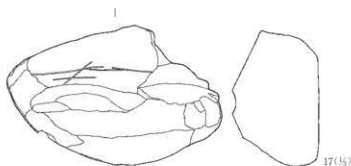


27图 B区1号竖穴建物出土遗物图(1)

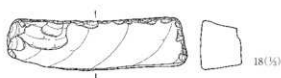
IV 検出した遺構と出土した遺物



16



17(5)



18(5)

28図 B区1号竪穴建物出土遺物図(2)

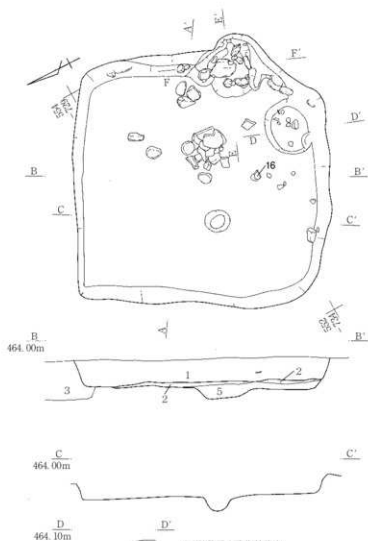
B区1号竪穴建物

NO. Pl.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	備 考
1	須恵器 杯蓋	埋没土 積み	幅 3.4	細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、積みは貼付。	
2	須恵器 皿	埋没土 口縁部片	口 11.4 底 5.4	細砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、積みは貼付。回転方向不明。高台は貼付。	混入か
3	須恵器 杯	埋没土 1/3	口 11.8 底 6.0 高 4.0	細砂粒/還元焰/ にぶい灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
4	須恵器 杯	+18 完形	口 12.5 底 7.0 高 3.9	細砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
5	須恵器 杯	+57 1/3	口 12.8 底 5.0 高 4.4	細砂粒/還元焰/ 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
6	須恵器 杯	埋没土 口縁部片	底 6.0	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	口縁部に墨書、判読不可能
7	須恵器 杯	埋没土 底部	底 6.4	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	
8	須恵器 杯	埋没土 底部	口 13.2 底 7.3 高 6.0	粗砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り。	底部に「寸」(釈文は「村」)の墨書。
9	須恵器 碗	+32 完形	口 9.4 底 6.1 高 6.4	粗砂粒/還元焰/ 青灰	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。	
10	須恵器 碗	埋没土 底部	底 9.2	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。	
11	須恵器 碗	埋没土 底部	底 9.2	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。	
12	須恵器 碗	埋没土 底部	底 6.0	微砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削り。	
13	須恵器 碗	埋没土 底部	口 18.6	粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、胴部上位は回転ヘラ削り。	
14	灰種陶器 長頸壺	埋没土 胴部下位片	底 4.5	細砂粒/良好/ 赤褐	口縁部下位は斜め方向のヘラ削り。	
15	須恵器 広口壺	カマド	口 18.6	粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、胴部上位は回転ヘラ削り。	
16	土師器 壺	+20 底部片	底 4.5	細砂粒/良好/ 赤褐	口縁部下位は斜め方向のヘラ削り。	
NO.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	備 考
17	石器	砥石	+48	完形	長 17.0 幅 11.1 厚 6.8 重 1603.5	砥石石、Pl.18
18	石器	不明	埋没土	ほぼ完形	長 14.1 幅 4.1 厚 3.8 重 339.0	安山岩、Pl.18

B区2号竪穴建物

本遺構はB区の中ほど東より、X=75,550~75,555-Y=-66,728~-66,733に位置する。他遺構との重複関係は北辺側でB区3号住居と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。平面形態は南東角を不鮮明ではあるがほぼ方形に近い形態を呈する。残存状態は良好である。規模は長軸4.05m、短軸3.97m、北辺3.64m、東辺3.88m、南辺3.56m、西辺3.82m、床面積は11.42㎡を測る。壁高は確認面より24~34cmである。主軸方位はN-123°-Eを指す。

廃棄状態



B区2号竪穴建物貯蔵穴

1. ぶい黄色(10YR4/3) Ⅲ層に類似、Ⅲ層より褐色が強い、 ϕ 1~2cmのHe-FP10%と焼土小ブロック3%含む。

内部施設は周溝は検出されなかったが、貯蔵穴と柱穴1本を検出した。貯蔵穴は東南角壁際に掘られていた。平面形態は楕円形で規模は長径87cm、短径72cm、深度14cmを測る。内部からは須恵器壺小片(未掲載)や礫が出土している。柱穴は中央より僅かに西に寄った位置に掘られていた。平面形態は楕円形で規模は長径42cm、短径35cm、深度26cmを測る。

床面は一部黒色土を10~20cmほど埋め戻してその上に5cmほど黒色土に若干ローム土を混ぜ合わせた土を入れて踏み固めている。

B区2号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR3/1) Hr-FP多い、ローム粒も含む。
2. 黒褐色土(10YR3/1) Hr-FP少量、ローム粒も含む、固く締まる、貼床土。
3. 黒褐色土(10YR3/1) Hr-FPやや多く、ローム粒と焼土粒を含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1) Hr-FP、ローム粒、焼土粒を含む。
5. 黒色土(10YR2/1) 黒色土主体、Hr-FP少量、ローム粒を含む。

29図 B区2号竪穴建物平面図・断面図

0 1:60 2m

IV 検出した遺構と出土した遺物

カマドは東辺の中央より若干南へ寄った位置に構築されていた。残存状態は燃焼部から煙道部天井部が竪穴建物廃棄時に壊されているが、その部分以外は比較的良好な状態であった。規模は全長0.97m、幅1.13m、燃焼部全長0.52m、幅0.50mである。袖には径10～20cmの円礫、角礫を使用して補強しているが他の住居より使用量は少ない。また、天井部には40×30cmの扁平な板状の礫を使用して補強していた。煙道部は屋外に延びるが、1号・3号竪穴建物ほど延びないようである。

掘方はほぼ中央から隅丸長方形で長軸134cm、短軸95cm、深度20cmを測る土坑を検出した。内部からは径20～30cmの垂角礫が出土しただけで性格などを

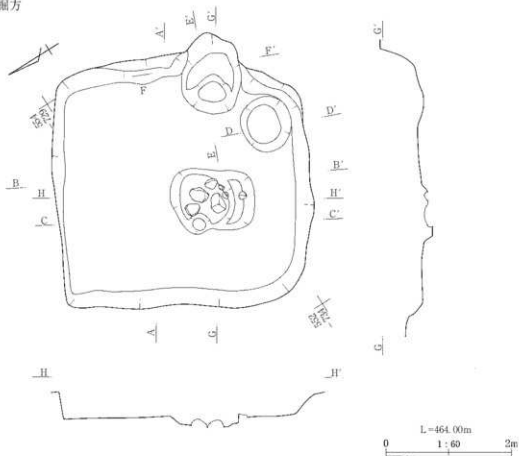
特定できる資料は見られなかった。

埋没状態は東辺際で僅かに三角堆積が観察できる他はIV層Hr-FPを多量に含む黒褐色土で短期間に埋没した様子が観察できた。

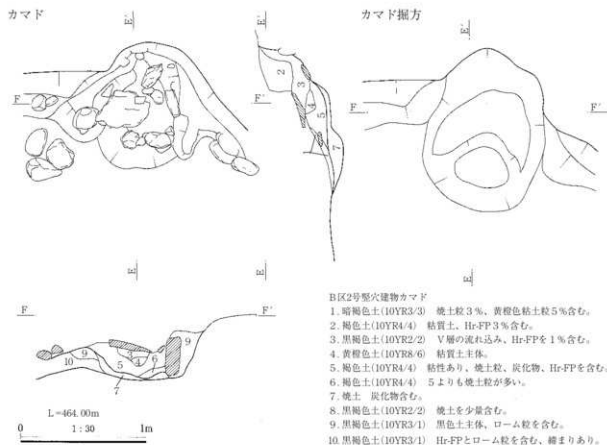
遺物は土師器、須恵器、石器、鉄器などが出土しているが、大部分は小片で図示できたものは少ない。1の土師器杯、17の砥石はカマド内、15の須恵器羽釜は掘方からの出土である。また、床面中央からは径15～30cmの礫が積み上げられた状態で出土していた。

本遺構の存続年代は出土遺物から10世紀第1四半期に比定される。

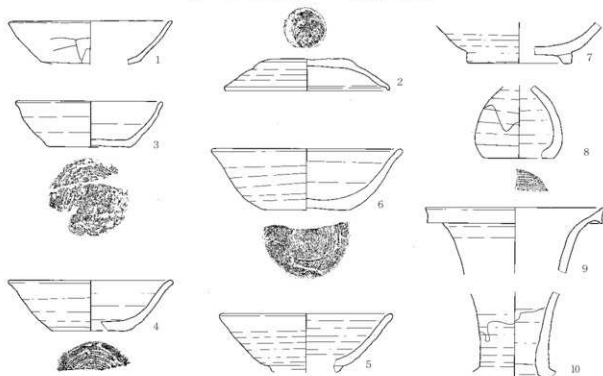
掘方



30図 B区2号竪穴建物掘方平面図・断面図

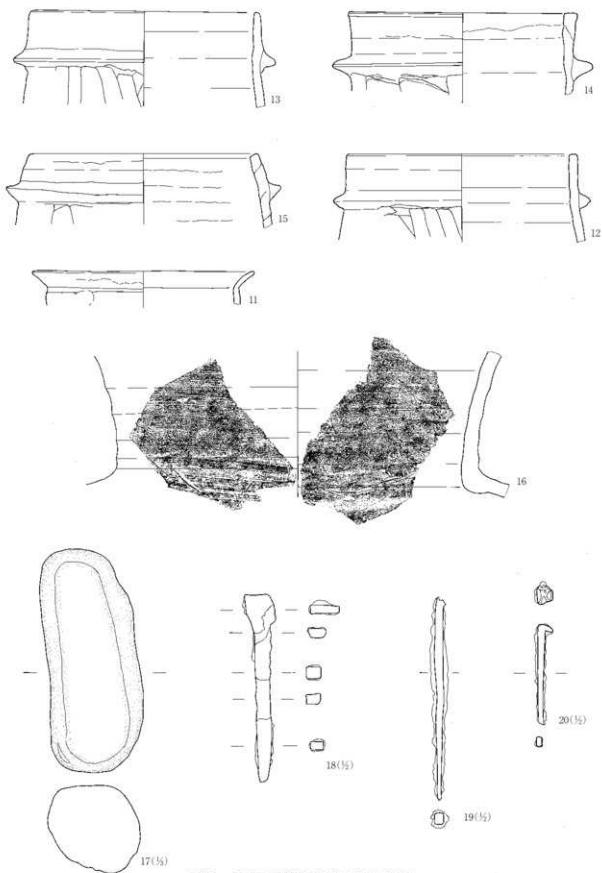


31図 B区2号竪穴建物カマド平面図・断面図



32図 B区2号竪穴建物出土遺物図(1)

IV 検出した遺構と出土した遺物



33図 B区2号竪穴建物出土遺物図(2)

B区2号竪穴建物

NO. PL	種類 器種	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	備 考
1	土師器 杯	カマド 臼縁部小片	口128 底 76 高 (34)	微砂粒/良好/ 黄い褐色	臼縁部上半横ナデ、下半横方向のヘラ削り。底部へラ削り。	
2	須恵器 杯蓋	埋没土 1/2	口130 高 (24)	細砂粒/還元焰/ 灰	ワタリ整形、回転右回り。天井部は回転糸切り後周辺部ナデ。編みは貼付であるが欠落。	
3	須恵器 杯	埋没土 臼縁部一部欠	口114 底 64 高 36	細砂粒/還元焰/ にぶい黄褐色		
4	須恵器 碗	埋没土 1/4	口126 底 62 高 40	細砂粒/還元焰/ にぶい黄褐色	ワタリ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5	須恵器 碗	埋没土 臼縁部片	口134 底 30 高 (47)	細砂粒/還元焰のみ /灰黄褐色	ワタリ整形、回転右回り。高台は貼付。	
6	須恵器 碗	埋没土 1/3	口146 底 70 高 (48)	粗砂粒/還元焰のみ /灰オリーブ	ワタリ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付であるが欠落。	
7	須恵器 碗	埋没土 底部片	底 82	細砂粒/還元焰/ 灰白	ワタリ整形、回転右回りか。高台は貼付。	
8	灰輪陶器 小瓶	埋没土 胴部片	底 56	微砂粒/還元焰/ 灰白	ワタリ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り。胴部最下段は回転へラ削り。	大塚2号築式期か
9	灰輪陶器 長頸壺	埋没土 臼縁部片	口138	黒色粒/還元焰/ 灰白	ワタリ整形。内面は全面輪轆が付着。	
10	灰輪陶器 長頸壺	埋没土 胴部片	胴 65	黒色粒/還元焰/ 灰白	ワタリ整形。内面は内外面に輪轆が付着。	
11	土師器 壺	埋没土 臼縁部小片	口176	細砂粒/良好/ 明赤褐色	臼縁部横ナデ、頸部ナデ。	
12	須恵器 羽釜	埋没土 臼縁部片	口180 跨 204	細砂粒/還元焰/ にぶい黄褐色	ワタリ整形、跨は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
13	須恵器 羽釜	埋没土 口~胴上位片	口194 跨 206	細砂粒/還元焰/ オリーブ黒	ワタリ整形、跨は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
14	須恵器 羽釜	埋没土 口~胴上位片	口180 跨 204	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄褐色	ワタリ整形、跨は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
15	須恵器 羽釜	側方 臼縁部片	口180 跨 216	粗砂粒/還元焰のみ /灰白	内外面に輪轆み痕が現れる。ワタリ整形、跨は貼付。胴部は縦方向のヘラ削り。	
16	須恵器 壺	+13 臼縁部下半片	胴 29.0	粗砂粒/還元焰のみ /灰黄	ワタリ整形。	
NO.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	備 考
17	石器	砥石	カマド	完形	長17.7 幅 7.4 厚 7.0 重145.1	砥石石、PL19
18	鉄器	釵か	埋没土	上部欠損	長(9.8) 幅 1.7 厚 0.7	PL19
19	鉄器	鎌または釘	埋没土	柄部欠	長(10.7) 幅 0.9 厚 0.9	PL19
20	鉄器	釘	埋没土	上半部	長(5.4) 幅 1.0 厚 1.0	PL19

B区3号竪穴建物

本遺構はB区の中央東端、X=75.553~75.5559-Y=-66.726~-66.731に位置する。他遺構との重複関係はB区2号竪穴建物、B区1号古墳周堀と重複する。新旧関係は本遺構のほうがB区2号竪穴建物より古く、B区1号古墳周堀より新しい。残存状態はB区2号竪穴建物と重複する部分の上位を欠くが全体的には良好である。平面形態は南北が若干長いがほぼ方形を呈する。規模は長軸5.53m、短軸5.53m、北辺4.92m、東辺5.80m、南辺4.72m、西辺4.77m、床面積は24.46㎡を測る。壁高は確認面より30~64cmである。主軸方位はN-115°-Eを指す。内部施設は柱穴、周溝は検出されなかったが、貯

蔵穴は検出できた。貯蔵穴は東南角よりに位置し、平面形態は楕円形で規模は長径80cm、短径53cm、深度15cmを測る。内部からは礫とともに9の須恵器碗が出土している。床面は南西部では20cm前後、その他の箇所は5cmほど黒色土で埋め戻した上にローム土、黒色土を版築状に固めて床面にしていた。

カマドは東辺のやや南へ寄った位置に構築されていた。残存状態は燃焼部の焚口付近の天井部が壊され、燃焼部、煙道部の内部では天井部の崩落がみられたが、その部分以外は非常に良好な状態であった。規模は全長1.83m、幅1.70m、燃焼部全長0.70m、幅0.53mである。袖には長さ30cm前後の垂直礫を並べて立てて補強し、その礫に長さ40cm前後、厚さ10

IV 検出した遺構と出土した遺物

～15cmの扁平な礫を多く渡し天井部の補強としその周りを黄橙色粘土を貼り付けている。煙道部は壁外に長く延びる。

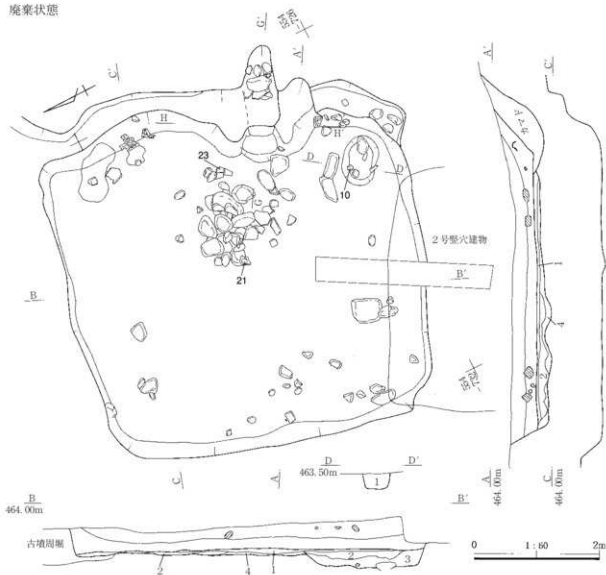
掘方は南側3分の1ほどが他の部分より20cmほど深く掘り込まれていた。また、北東角際ではやや重んだ楕円形で径70×50cm、深度25cmの土坑状の落ち込みが検出されたが、この落ち込みもB区2号竪穴建物のもと同様で8点ほどの礫が出土しただけであった。

埋没状態は東から多量のIV層Hr-FPを含む黒褐色土で埋没した様子が観察できることから自然埋没である。なお、東辺カマド北側では黄橙色粘土の流れ廃棄状態

込みとともに焼土、炭化材が確認され、部分的に屋根材が焼失した様子が窺えた。

遺物は土師器、須恵器、石器、鉄器などが出土しているが、大部分は小片で図示できたものは遺物量の割には少ない。6の須恵器杯、23の須恵器甕、19の土師器甕はカマド内、15の土師器甕、24の石製紡錘車は掘方、18の釘は床面からの出土である。また、床面中央からは径15～50cmの礫が多量に積み上げられた状態で出土していた。

本遺構の存続年代は出土遺物から9世紀第3四半期に比定される。



34図 B区3号竪穴建物平面図・断面図

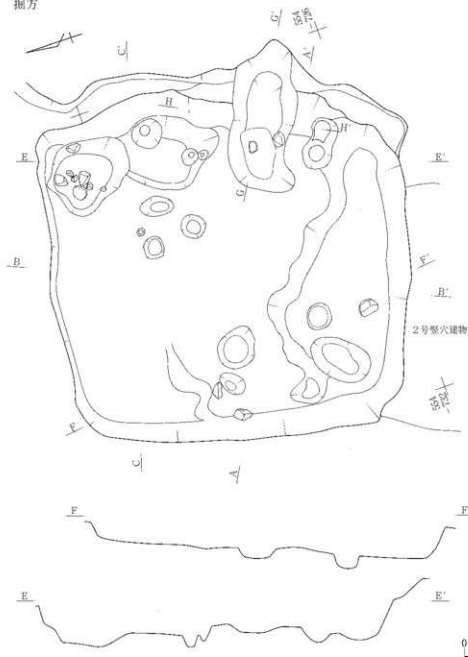
B区3号竪穴建物

1. 黄褐色土(10YR7/8)と黒褐色土(10YR3/1)との互層、2~3cmの互層で数層が重なる。締まりよく固い。粘床土。
2. 暗褐色土(10YR3/3) Hr-FP、黄褐色土粒(10YR7/8)、礫(ϕ 1~3cm)を多く含む。
3. 黒色土(10YR2/1) Hr-FP、小礫(ϕ 1~5cm)を含む。
4. 黒色土(10YR2/1) Hr-FPをごく少量含む。

B区3号竪穴建物貯蔵穴

1. 黒褐色土(10YR3/2) Ⅲ層に類似、黄褐色粘土の小ブロックを10%含む。

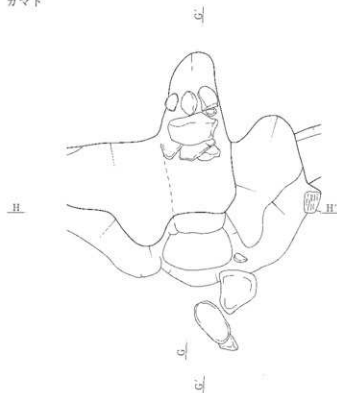
掘方



35図 B区3号竪穴建物掘方平面図・断面図

IV 検出した遺構と出土した遺物

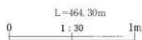
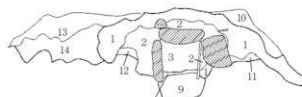
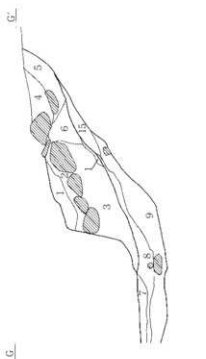
カマド



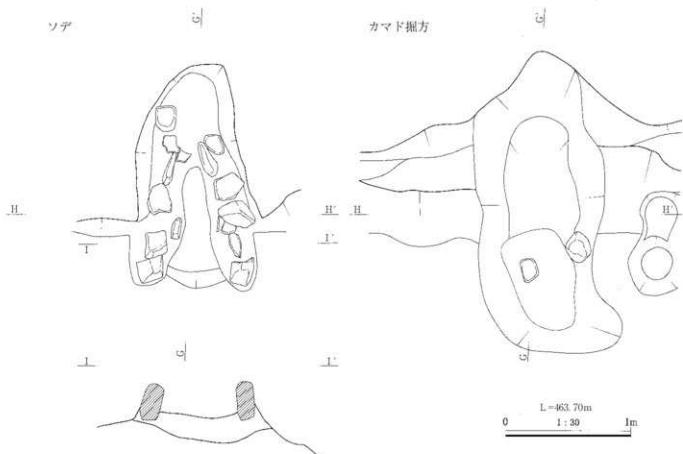
B区3号竪穴建物カマド

1. 黄橙色土(10YR8/6) カマド天井部、粘土。
2. 1の焼土化したものカマド天井部、粘土。
3. 黒褐色土(10YR2/3) V層の流れ込み、焼土粒を5%含む。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 竪穴建物埋没土と同様、流れ込み。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 焼土含む。
6. 褐灰色土(7.5YR4/1) 焼土多く含む、締まり弱くボツボツの状態。
7. 黄橙色土(10YR8/6)と黒褐色土(10YR2/3)の互層、貼り床、固く締まっている。
8. 焼土 黄橙色土が焼土化したものか、黒褐色土(10YR2/3)、炭化物を含む。
9. 暗褐色土(10YR3/3) 小礫(φ1~3cm)を多く含む。
10. にぶい黄橙色土(10YR6/4)黄橙粘土(カマド構築土)とV層、III層を30%含む。
11. 黒褐色土(10YR2/2)焼土、黄橙色土粒を含む。
12. 黒褐色土(10YR2/2)焼土粒、黄橙色土粒を含む。
13. 黄橙色土(10YR8/6)黄橙粘土(カマド構築土)の流れだし。
14. 黒褐色土(10YR2/2) V層主体、黄橙色粘土ブロックを5%とHr-FPを3%含む。
15. 暗褐色土(10YR3/2)焼土、炭化物を多量に含む。

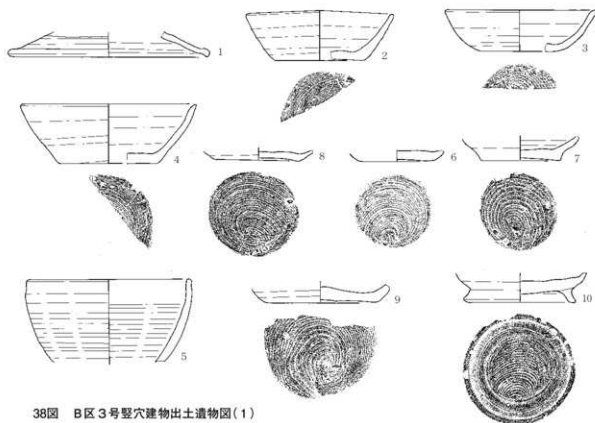
天井部



36図 B区3号竪穴建物カマド平面図・断面図(1)

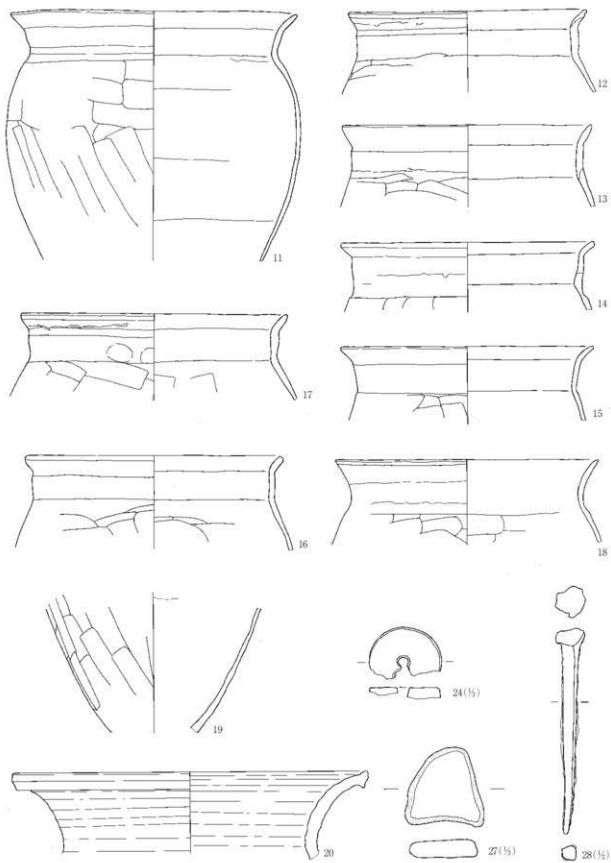


37図 B区3号竪穴建物カマド平面図・断面図(2)

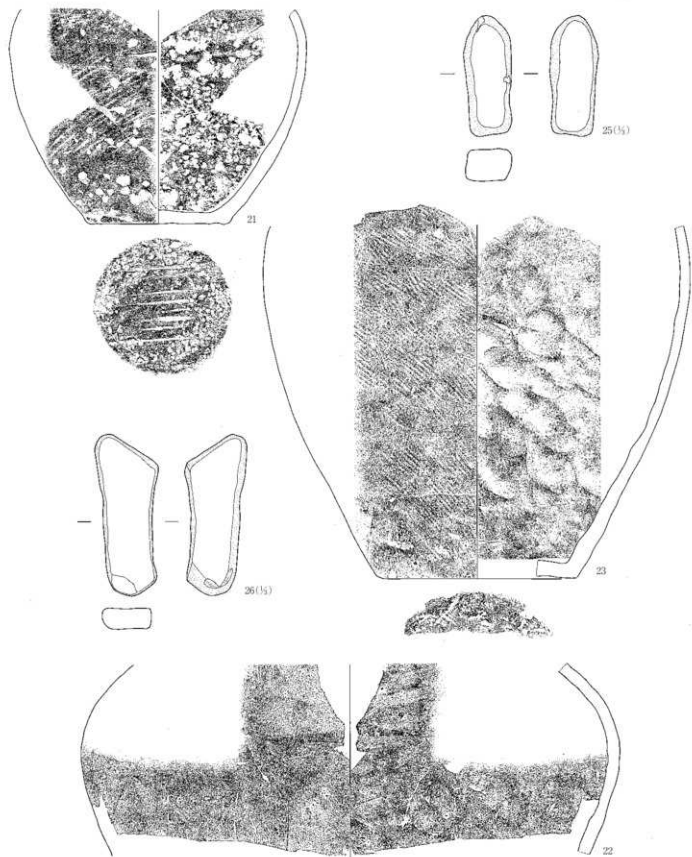


38図 B区3号竪穴建物出土遺物図(1)

IV 検出した遺構と出土した遺物



39図 B区3号竪穴建物出土遺物図(2)



40图 B区3号竪穴建物出土遺物图(3)

IV 検出した遺構と出土した遺物

B区3号竪穴建物

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備要
1	須恵器 杯蓋	埋没土 口縁部片	口156	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部中程までは回転へう割り。	
2	須恵器 杯	埋没土 1/5	口114 底7.0 高39	粗砂粒/還元焰/オリーツ黒	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
3	須恵器 杯	埋没土 1/5	口118 底6.4 高33	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
4	須恵器 杯	埋没土 1/4	口136 底7.6 高47	粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
5	須恵器 碗	埋没土 口縁部片	口132	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、内外面とも細かくロクロ痕が残る。	
6	須恵器 杯	カマド 底部	底58	粗砂粒/還元焰/にぶい焼	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
7	須恵器 杯	埋没土 底部	底62	粗砂粒/還元焰/にぶい焼	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
8	須恵器 杯	埋没土 底部	底66	粗砂粒/還元焰/にぶい焼	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
9	須恵器 杯	埋没土 底部片	底88	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
10	須恵器 碗	貯蔵穴内 底部	底80	粗砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。高台は貼付。	
11	土師器 妻	埋没土 口~胴上位片	口224	粗砂粒/良好/にぶい焼	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、胴部上位は横方向へう割り、中位は斜め方向へう割り。	
12	土師器 妻	埋没土 口縁部片	口188	粗砂粒/良好/にぶい焼	口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。	
13	土師器 妻	埋没土 口縁部片	口196	粗砂粒/良好/焼	胴部に輪積み痕が残る。口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。	
14	土師器 妻	埋没土 口縁部片	口200	粗砂粒/良好/にぶい焼	口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。	
15	土師器 妻	側方 口縁部片	口200	粗砂粒/良好/にぶい赤黒	口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。	
16	土師器 妻	埋没土 口~胴上位片	口200	粗砂粒/良好/にぶい焼	口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。	
17	土師器 妻	埋没土 口~胴上位片	口208	粗砂粒/良好/にぶい焼	口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。	
18	土師器 妻	埋没土 口縁部片	口220	粗砂粒/良好/にぶい焼	口縁部横ナデ、胴部ナデ、胴部上位は横方向のへう割り。内面胴部はナデ。	
19	土師器 妻	カマド 胴部下位片		粗砂粒/良好/にぶい焼	内面に輪積み痕が残る。胴部下位は縦方向のへう割り。内面はヘラナデ。	
20	須恵器 妻	埋没土 口縁部片	口280	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。	
21	須恵器 妻	+1.5 胴部下位~底部	底11.0	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。胴部下半には叩き痕が残る。	
22	須恵器 妻	埋没土 胴部上位片		粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、内外面ともナデであるが、内面にはアテ具痕がすかすかに残る。	
23	須恵器 妻	カマド、+10 胴部上位~底部	底15.6	粗砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形。胴部外面には叩き痕、内面にはアテ具痕が残る。	
NO.	種類	器種	出土位置	残存率	計測値	備要
24	石製品	紡錘車	側方	1/2裏面剥落	径 5.6 孔 1.0	PL19
25	石器	砥石	埋没土	完形	長 9.6 幅 3.7 厚 2.5 重 163.6	PL20
26	石器	砥石	埋没土	完形	長 12.8 幅 4.8 厚 1.6 重 170.0	PL20
27	石器	砥石	埋没土	完形	長 6.3 幅 5.2 厚 1.5 重 89.3	PL20
28	鉄器	釘	カマド前床直	完形	長 10.9 幅 0.9 厚 0.8	PL20

B区4号竪穴建物

本遺構はB区中央や西より、X=75,556~75,560-Y=-66,736~-66,739に位置する。他遺構との重複関係は東辺際でB区1号竪穴建物と重複する。

新旧関係は本遺構のほうが新しい。残存状態は西側が確認面から床面まで浅いが比較的良好である。平面形態は北側辺が中程で山折り状に角度をもつため変則的な五角形を呈する。規模は南北4.17m、東西3.

24m、東辺3.00m、南辺2.47m、西辺3.15m、北辺の西側1.95m、東側1.53m、床面積は8.87㎡を測る。壁高は西側が確認面から10～57cmである。主軸方位はN-245°-Eを指す。

内部施設は柱穴、貯蔵穴は検出されなかったが、周溝は西辺から北辺で断続的ではあるが検出された。周溝は幅15cm前後、深度5～10cmである。

床面は東から西へ向けてわずかに傾斜しており、ローム土に黒色土を混ぜたものを踏みしめて貼床としていた。

カマドは東辺の中央やや北側に構築されている。残存状態は燃焼部天井部が堅穴建物廃棄時に壊されているが、その部分以外は良好な状態であった。規模は全長1.20m、幅0.98m、燃焼部全長0.70m、幅0.35mである。袖は両袖とも径10cm前後で長さ20～30cmの棒状円礫を立てた状態に設置し、その周りを粘土で覆っていた。天井部の煙道よりは長さ50cm前後、幅10～20cm、厚さ20cm前後の亜角礫を使用して補強していた。燃焼部でも支脚に径7cm、長さ25cm廃棄状態

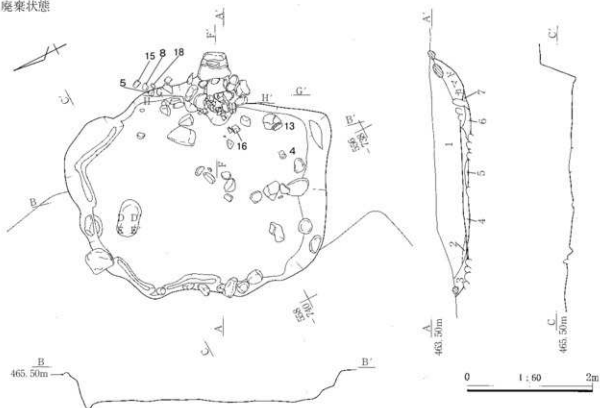
cmと径10cm、長さ20cmの棒状円礫を5cmの間隔で立てて使用していた。

掘方は西側は下層に堆積している礫層上面まで掘り込まれており、東側もこれに対応した深さまでの掘り込みであった。掘方面はほぼ平坦な状態であるが、北東角に円形で径50cm、深度20cm、北西部に楕円形で径60×30cm、深度10cmの落ち込みが確認された。これらの落ち込みは遺物などの出土もないため床下土坑などの施設ではないとみられる。

埋没状態は大部分がHr-FPを多量に含む黒褐色土で短時間に埋没した様子が観察された。

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、石器などが出土している。その出土はカマド、床面東南角付近、カマド北側の壁部分にまとまった出土がみられた。カマド北側壁上からは椀などの食器具がまとまって出土し、東南角からは完形に近い残存状態で13の須恵器羽釜が横転して押し潰された状態で出土している。

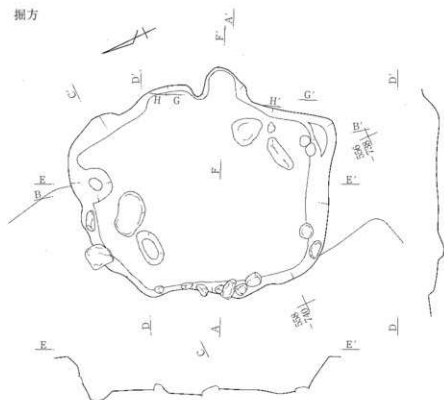
本遺構の存続年代は出土遺物から10世紀第2四半期に比定される。



41図 B区4号堅穴建物平面図・断面図

IV 検出した遺構と出土した遺物

掘方

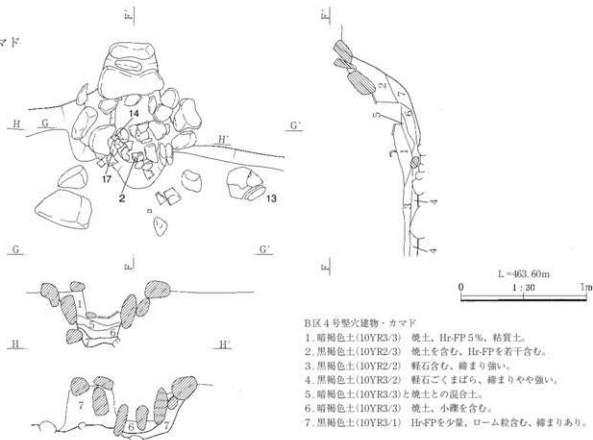


B区4号竪穴建物

1. 黒褐色土 多量のHr-FPと少量のローム粒を含む。
2. 黒褐色土 V層の流れ込み、Hr-FP 1%。
3. 黒褐色土 V層の流れ込み。
4. 黄褐色土 粘質土、ローム土主体、粘床土。
5. ロームブロック主体、黒色土を含む。
6. 5に類似、焼土粒を含む。
7. 6に類似、6より焼土粒が多い。

42図 B区4号竪穴建物掘方平面図・断面図

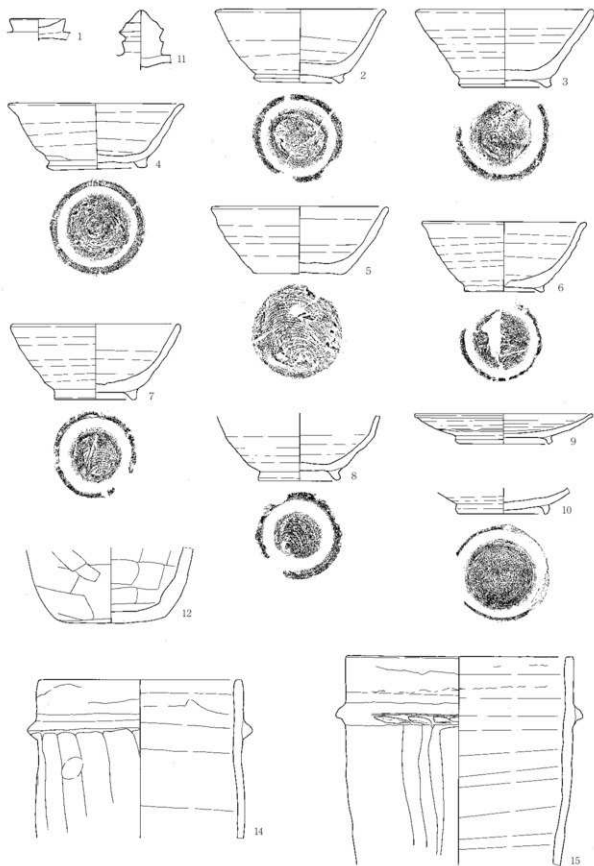
カマド



B区4号竪穴建物・カマド

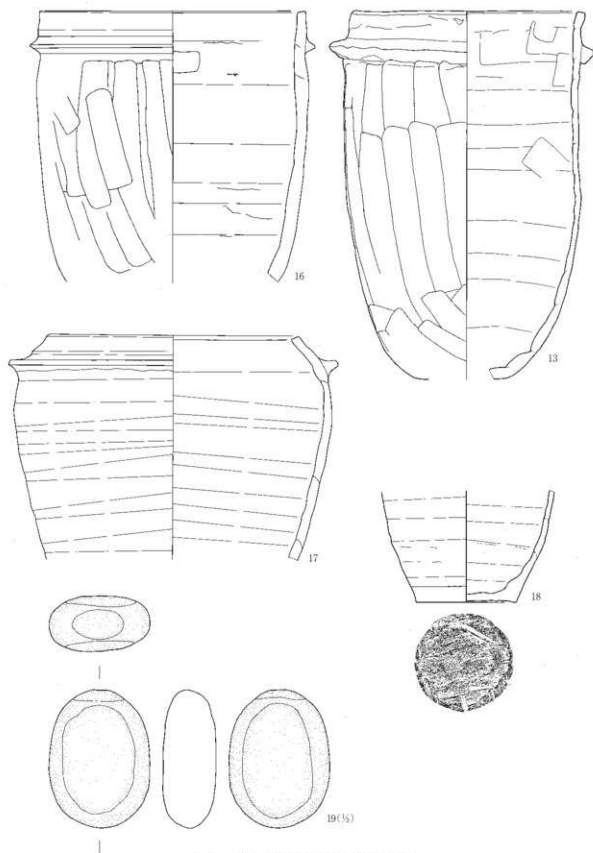
1. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土、Hr-FP 5%、粘質土。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 焼土を含む、Hr-FPを若干含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 軽石含む、締まり強い。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 軽石ごくまばら、締まりやや強い。
5. 暗褐色土(10YR3/3)と焼土との混合土。
6. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土、小礫を含む。
7. 黒褐色土(10YR3/1) Hr-FPを少量、ローム粒含む、締まりあり。

43図 B区4号竪穴建物カマド平面図・断面図



44 図 B区4号壜穴建物出土遺物図(1)

IV 検出した遺構と出土した遺物



45図 B区4号竪穴建物出土遺物図(2)

B区4号竪穴建物

NO.	種類	出土位置	計測値	粘土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
1	須恵器 杯蓋	埋没土 積み	横 4.3	粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形。積みは貼付。	
2	須恵器 碗	東壁上(欄) 3/4	口13.2 底 7.0 高 6.4	粗砂粒/還元焰/ 暗灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切りか、高台は貼付。	
3	須恵器 碗	埋没土 口縁部一部欠	口13.5 底 7.2 高 6.5	粗砂粒/還元焰/ 黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
4	須恵器 碗	* 1.3 口縁部一部欠	口13.6 底 7.6 高 7.4	粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法はナデのため不明、高台は貼付。	
5	須恵器 碗	東壁上(欄) 1/2	口13.8 底 7.2 高 5.3	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄緑	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
6	須恵器 碗	埋没土 2/3	口12.6 底 6.2 高 5.5	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄緑	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法はナデのため不明、高台は貼付。	
7	須恵器 碗	カマド 2/3	口13.0 底 6.4 高 6.0	粗砂粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
8	須恵器 碗	東壁上(欄) 底~口縁部片	底 3.2	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄緑	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り、高台は貼付。	
9	灰釉陶器 皿	埋没土下部 1/2	口13.8 底 7.5 高 2.4	夾雑物なし/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部はナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛けか。	大塚2号窯式期
10	灰釉陶器 皿	欄方 底部	底 6.7	白色粒/還元焰/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部はヘラ削り後ナデ、高台は貼付。施釉方法不明。	大塚2号窯式期
11	須恵器 短頸壺蓋	床直 積み		粗砂粒/還元焰/ にぶい黄	ロクロ整形、積みは貼付。	
12	土師器 壺	カマド 底~口縁部片	底 8.4	粗砂粒/良好/ 灰黄緑	側部下位は横方向へのヘラ削り、底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
13	須恵器 羽釜	床直 一部欠損	口17.6 踵 20.8 底 7.2 高 29.0	粗砂粒/還元焰/ざみ /にぶい黄緑	内面に輪積み痕が残る。ロクロ整形、跨は貼付。側部は底部へ向けての縦方向へ削り。	
14	須恵器 羽釜	カマド 口~側上片	口15.2 踵 17.8	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄緑	輪積み痕が残る。ロクロ整形、跨は貼付。側部は跨へ向けての縦方向へ削り。	
15	須恵器 羽釜	東壁上(欄) 口~側上片	口17.6 踵 19.4	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄	ロクロ整形、口縁部に輪積み痕が残る。跨は貼付。側部は底部から跨へのヘラ削り。	
16	須恵器 羽釜	カマド 口~側上片	口20.8 踵 22.4	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄	ロクロ整形、内面に輪積み痕が残る。跨は貼付。側部は下位から跨へのヘラ削り。	
17	須恵器 羽釜	カマド 口~側中片	口20.0 踵 24.0	粗砂粒/還元焰/ にぶい黄	ロクロ整形、内面に輪積み痕が残る。跨は貼付。	
18	須恵器 壺	東壁上(欄) 側下位~底	底 7.8	粗砂粒/還元焰/ 明黄緑	ロクロ整形、輪積み痕が残る。底部ヘラナデ。	
NO.	種類	出土位置	計測値	形状	長 10.9 幅 7.9 厚 4.2 重 508.7	摘要
19	石器	礫石	カマド	定形		PL21

B区5号竪穴建物

本遺構はB区北端、X = 75.574 ~ 75.576 - Y = -66.729 ~ -66.731に位置する。遺構の北東側5分の4は調査区外に延びるため全貌は不明である。他遺構との重複関係は調査区内では確認されていない。残存状態は確認面から床面まで浅いが比較的良好である。平面形態は方形または長方形を呈すると想定される。規模は東西3.32m、南北は調査区内で1.45m、南辺3.30mを測る。壁高は確認面から10~15cmと比較的浅い。主軸方位は貯蔵穴の位置などから東カマドと想定されることからN-124°-Eを指す。

内部施設は柱穴は検出されなかったが、貯蔵穴と周溝が検出された。貯蔵穴は東南角の南壁際位置

し、平面形態は楕円形を呈し、規模は長径50cm、短径41cm、深度41cmを測る。周溝は西辺壁際から検出され、幅10cm前後、深度11~15cmである。

床面は西壁が地山をそのまま踏み固めていたが、貯蔵穴北側のカマド周辺は20cm前後黒色土上にローム土を若干混ぜた土砂で貼床を行っていた。

カマドは調査区内では確認されていないが、貯蔵穴北側の東辺に構築されたと想定される。

掘方は貯蔵穴北側だけ床面より20cmほど彫り込まれていたが、床下土坑などは確認されなかった。

埋没状態は埋没土の状態から比較的短時間による自然埋没が観察された。

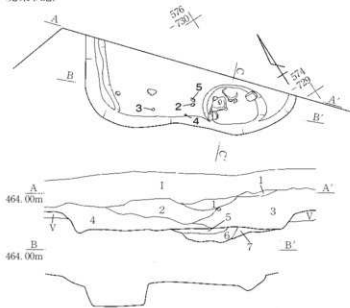
遺物は須恵器碗、羽釜が貯蔵穴や床面から出土し

IV 検出した遺構と出土した遺物

ているが、その出土量は少なく、図示できた以外は
みな小片であった。

本遺構の存続年代は出土遺物から10世紀第2四半
期に比定される。

廃棄状態



46図 B区5号竪穴建物平面図・断面図



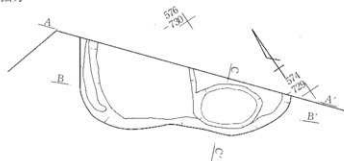
B区5号竪穴建物・貯蔵穴

1. 黒褐色土(10YR3/2) V層とは異なる、Hr-FP
を1%とφ1cmの円礫を3%含む。さらさら
して締まりない。

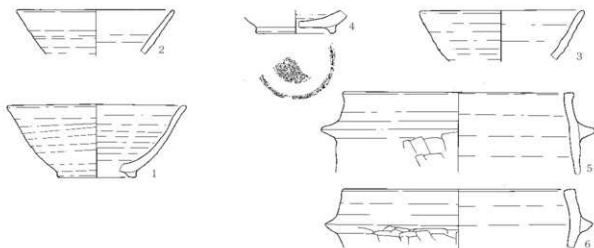
B区5号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR2/3) 直層に類似、φ1cmのHr-FPを
1%とφ1~2cmの円礫を3%含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 直層に類似、φ1cmのHr-FPを
3%とφ1~2cmの円礫を5~7%含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 2に類似、2よりやや黒い色調。
円礫が少ない。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 2,3に類似、2,3よりHr-FP、
円礫が少ない。
5. 黒色土(10YR2/1)と明黄褐色ローム(10YR6/8)との互
層、貼り床、締まり強い。
6. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒、小礫(φ5mm)を含む、
締まり強い。
7. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) 黒褐色土(10YR3/2)と
ロームが混じった土、φ5mmの小礫を含む。

掘方



47図 B区5号竪穴建物掘方平面図



48図 B区5号竪穴建物出土遺物図

B区5号壘穴建物

NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成/ 色調	成形・整形の特徴	備 考
1	須恵器 壺	埋没土下部 1/4	口 13.8 底 6.2 高 5.8	細砂粒/還元塩類 /灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。高台は貼付。	
2	須恵器 壺	+ 9 口縁部片	口 13.0	細砂粒/還元塩類/ 黄灰	ロクロ整形、回転右回り。	
3	須恵器 壺	床直 口縁部片	口 13.0	粗砂粒/還元塩類/ 灰	ロクロ整形、回転右回り。	
4	須恵器 壺	+ 8 底部片	底 6.0	粗砂粒/酸化塩類/ 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転軸切り、高台貼付。	
5	須恵器 羽釜	+ 10 口縁部片	口 18.0 跨 21.0	粗砂粒/酸化塩類/ ぶい黄褐	ロクロ整形。跨は貼付、胴部は縦方向のへら削り。	
6	須恵器 羽釜	埋没土下部 口縁部片	口 18.0 跨 21.6	粗砂粒/酸化塩類/ ぶい褐	ロクロ整形。跨は貼付、胴部は縦方向のへら削り。	

(2) 土坑

B区1号土坑

本遺構はB区の南端、X=75,549~75,551-Y=-66,733~-66,735に位置する。他遺構との重複関係は近年の耕作痕と重複するが、古代や中近世の遺構との重複関係は確認されなかった。残存状態は東側部分で耕作によって一部欠くが比較的良好である。平面形態は隅丸長方形に近い形態である。規模は長軸2.84m、短軸2.34m、深度0.18mを測る。

内部底面には東側の一部で近年の耕作によって礫が取り除かれていたが、全面に径25~35cm、厚さ10~15cmの扁平な円礫を主に敷きつめていた。

埋没状態は遺構確認面から底面までが僅かなため明らかにすることはできなかった。

遺物は東側もから1の須恵器小型広口壺が出土している。

本遺構の時期は出土遺物から10世紀前半代に比定されるが、その性格については明らかにできるような遺物は出土していない。

B区2号土坑

本遺構はB区南端、X=75,547~75,549-Y=66,737~66,739に位置する。他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。平面形態は楕円形を呈する。規模は長軸1.92m、短軸1.53m、深度0.17mを測る。

内部には東よりにピット状の落ち込みをもつ。この落ち込みは楕円形を呈し、規模が長軸0.78m、短軸0.65m、確認面からの深度0.89mを測る。

埋没状態は土層断面の観察ではほぼ水平な堆積が観察されたが自然埋没か人為的な埋没なのかは判断できなかった。

遺物は土師器製の小片が20点ほど出土したが、本遺構に伴うものかは明らかではない。

本遺構の時期は埋没土から平安時代に比定した。

B区3号土坑

本遺構はB区南半部、X=75,551~75,553-Y=-66,734~-66,738に位置する。他遺構との重複関係はB区4号土坑と重複する。新旧関係は本遺構のほうが新しい。平面形態は矩形を呈する。規模は長軸3.41m、短軸2.13m、深度0.20mを測る。

内部には中程に一回り小規模な土坑状の落ち込みをもつ。この落ち込みは楕円形を呈し、断面は西側にテラスをもつ2段の掘り込みである。規模が長軸1.84m、短軸1.00m、確認面からの深度0.75mを測る。

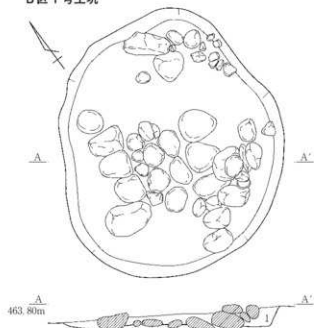
埋没状態は土層断面の観察ではIV層Hr-FPを多く含む黒褐色土の単一土だけが観察されることから自然埋没と観あげられる。

遺物は土師器製や須恵器製などの小片が300点ほど出土したが、本遺構に伴うものかは明らかではない。

本遺構の時期は出土遺物からは比定できなかったが、埋没土から平安時代に比定される。

IV 検出した遺構と出土した遺物

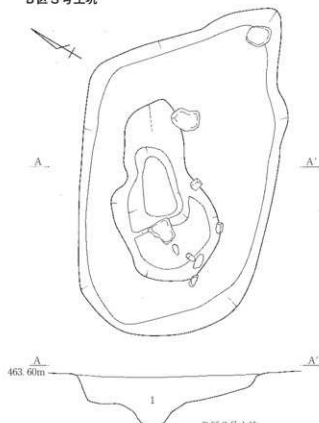
B区1号土坑



B区1号土坑

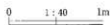
1. 黒褐色土(10YR3/2) Ⅲ層に類似、 ϕ 1~2cmのHr-FPを5%と ϕ 2~5cmの円礫、垂角礫を10%含む。

B区3号土坑

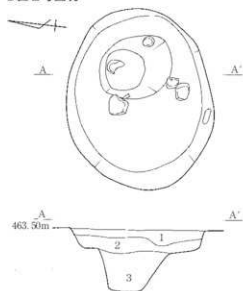


B区3号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ϕ 1~2cmのHr-FPを5~10%含む。

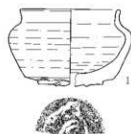


B区2号土坑



B区2号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) Ⅲ層に類似、 ϕ 1~2cmのHr-FPを3%と ϕ 1~3cmの円礫、垂角礫を3%含む。
2. Hr-FP主体、黒褐色土(Ⅲ層)が混入。
3. 黒褐色土(10YR2/2) V層に類似、 ϕ 1cmのHr-FP、 ϕ 1~2cmの円礫を2%含む。



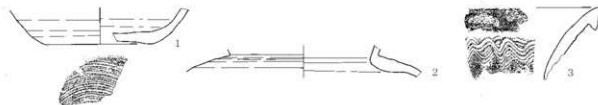
49図 B区1号・2号・3号土坑平面図・断面図・出土遺物図

土坑		種類	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
NO.	種類	器種	残存率				
1	須恵器	B区1号土坑		口 7.4 底 7.0 高 6.1	細砂粒/還元焼/灰黄緑	ロタロ整形、回転右回り。底部へう起こし。内外面に自然釉が付着。	
2	鉄器	棒状	2号土坑		一部片か	長 7.8 幅 0.6 厚 0.6	直線か、PL21

(3) 遺構外出土遺物

遺構外として見つかった遺物のうち図示できたものは3点である。1の須恵器杯はB区1号古墳から

出土したものであるが、古墳の年代と遺物の年代が大きく離れるため遺構外として扱った。他の2点は遺構に伴わなかったものである。



50図 平安時代遺構外出土遺物

平安時代遺構外出土遺物		種類	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
NO.	種類	器種	残存率				
1	須恵器	杯	B区1号古墳 底部片	底 8.0	細砂粒/還元焼/灰	ロタロ整形、回転右回り。底部回転糸切り。	
2	須恵器	出口壺	550-740 頸部片	頸 11.8	細砂粒/還元焼/灰	ロタロ整形、回転右回りか。	
3	須恵器	要	B区 口縁部片		粗砂粒/還元焼/灰黄緑	ロタロ整形、口縁部には波状文。	

5. 中世・近世

(1) 墳

本遺構はA区のほぼ中央、X = 75, 459～75, 463 - Y = -66, 788～-66, 793に位置する。本遺構は道路計画以前は頂部に「お宮」が設けられていたが、北への傾斜地に小丘を呈し、頂部に比較的大きな礎が配置されていることから古墳ではないかと想定された。そのため、遺構の性格を把握するため頂部を中心に試掘坑を設定して調査を行った。試掘坑の観察では盛土は確認されたが、礎は頂部だけであることから「お宮」の台座として構築されたものと判明した。

他遺構との重複関係はA区16号土坑と重複する。

新旧関係は本遺構のほうが新しい。平面形態は周囲の樹木根によって本来の形態がわからない状態であったが頂部に配置された礎と同様に長方形であったと想定される。規模は4.60m、短軸3.50m、頂部までの高さ、南0.66m、東0.70m、北0.80m、西1.20mを測る。主軸方位はN-18°-Eを指す。

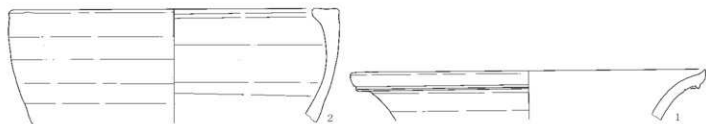
頂部は南北2.60m、東西1.50mの長方形に長さ40～60cm、幅20～40cm、厚さ10～30cmの垂角礎を配置してあった。

盛土はローム土に粗い砂を混ぜて固めているが、土層断面では版築などの工法は確認されなかった。遺物は頂部より陶器変片、鉢片が出土している。

IV 検出した遺構と出土した遺物



51図 A区壇平面図・断面図



52図 A区壇出土遺物図

A区壇						
NO.	種類	出土位置	計測値	胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	備 考
1	陶器 罌	壘石面 口縁部片	□28.0	細砂粒/還元焼/ 灰色	ロクロ整形、内外面に自然釉が付着。	
2	軟質陶器 鉢	壘石面 口縁部片	□26.0	細砂粒/還元焼/ 灰色	ロクロ整形、口唇端部は使用痕で平滑になっている。	

(2) 土坑

中近世の土坑はA区から15基検出した。これらの

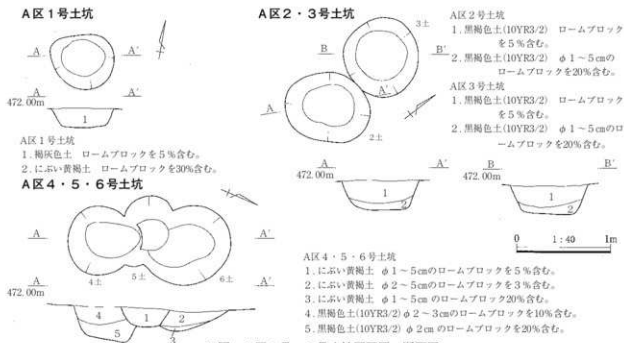
土坑からの出土遺物はみられないが、埋没土の状態から中近世と判断した。

2表 中世・近世土坑一覧

土坑 NO.	位 置	平面形態	断面形態	重 規		長 径	短 径	深 度
				新	旧			
A 1	454-792	楕円形	逆台形			68	58	20
A 2	454-791	楕円形	逆台形			91	74	30
A 3	455-791	楕円形	逆台形			85	80	27
A 4	456-791	楕円形	逆台形	A区5号土坑		79	80	37
A 5	457-791	楕円形	逆台形		A区4号・6号土坑	-	-	34
A 6	457-791	楕円形	平円形	A区5号土坑		97	82	31
A 7	458-790	楕円形	逆台形			85	65	72
A 8	458-790	楕円形	逆台形			90	71	40
A10	465-793	楕円形	鏡形			96	71	56
A11	466-794	楕円形	逆台形			69	58	16
A12	467-793	矩形	逆台形			81	78	25
A13	468-792	矩形	逆台形			197	103	29
A14	458-789	楕円形	逆台形	A区15号土坑(新旧不明)		79	75	28
A15	458-789	楕円形	逆台形	A区14号土坑(新旧不明)		66	64	32
A16	463-791	不整形	逆台形	A区壇		89	70	102

Xは値の前に75、Yは-66を省略してある

計測値の単位cm



53図 A区1号~6号土坑平面図・断面図

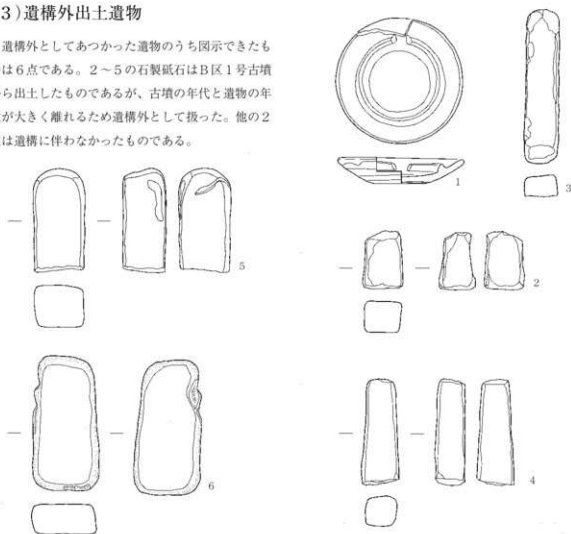
IV 検出した遺構と出土した遺物



54図 A区7号・8号、10号～16号土坑平面図・断面図

(3) 遺構外出土遺物

遺構外としてあつた遺物のうち図示できたものは6点である。2～5の石製砥石はB区1号古墳から出土したものであるが、古墳の年代と遺物の年代が大きく離れるため遺構外として扱った。他の2点は遺構に伴わなかったものである。



55図 中世・近世遺構外出土遺物図

中世・近世遺構外出土遺物

NO.	種 類	出 土 位 置	計 測 値	胎土/焼成/ 色調	成 形・整 形 の 特 徴	摘 要
1	陶器	B区	口 98 底 4.4	夾雑物ほとんど無 /還元焼	ロケロ整形、回転左回りか。	瀬戸・美濃焼
21	灯明皿	ほぼ完形	高 21			
NO.	種 類	器 種	出 土 位 置	残 存 率	計 測 値	摘 要
2	石器	砥石	B区1号古墳	1/2	長 4.5 幅 3.4 厚 2.9 重 52.5	PL21
3	石器	砥石	B区1号古墳	完形	長 12.2 幅 2.7 厚 1.6 重 103.1	PL21
4	石器	砥石	B区1号古墳	下部欠損	長 8.4 幅 3.0 厚 2.2 重 109.4	PL21
5	石器	砥石	B区1号古墳	1/2	長 8.1 幅 4.1 厚 3.3 重 225.5	PL21
6	石器	砥石	B区	完形	長 10.7 幅 5.2 厚 2.3 重 262.2	PL21

V 西川原古墳群出土の馬歯・馬骨

植崎修一郎

はじめに

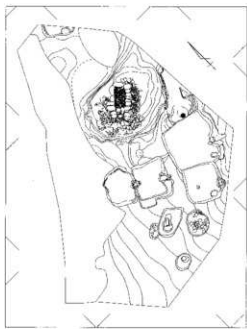
西川原古墳群は、群馬県利根郡川場村生品に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成19(2007)年9月～10月まで実施され、B区1号古墳周堀より、馬(ウマ)[*Equus caballus*]の歯及び骨が出土したので以下に報告する。獣骨は、同年10月5日に本報告者が取り上げた。

本古墳の年代は出土遺物より、約7世紀後半の古墳時代終末期に比定されており、周堀出土の本馬歯・馬骨も被葬者に伴う殉殺の可能性が高いと推定される。

なお、馬歯の計測方法は、フォン・デン・ドリッシュ[von den Driesch](1976)の方法に従った。

1. 馬歯・馬骨の出土状況

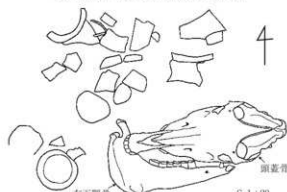
本馬歯・馬骨は、B区1号古墳周堀の南部の底面から出土している。馬歯の出土状況からは、上顎は顔面部が西側に向いており、下顎は顔面部が東側に向いた状態である。朽ち果てる過程で、何らかの理由により逆の方向に向くことになったのであろう。



56図 馬歯・馬骨の出土位置



写真1 馬歯・馬骨の出土状況[南から撮影]



57図 馬歯・馬骨の出土状況復元図(南から見た図)

2. 馬歯・馬骨の残存状態

馬歯は、上下臼歯がほぼ残存している。また上下顎骨も一部残存している。しかしながら、その他の四肢骨は粉末状を呈しており、残存状態は非常に悪く同定も不可能であった。

3. 馬歯・馬骨の個体数

上下臼歯には重複部位が認められないため、馬の個体数は1個体であると推定される。

4. 馬歯・馬骨の性別

馬の性別は、犬歯の有無及び寛骨の形態で推定することが可能である。しかしながら、今回、犬歯及び寛骨は検出されていないため、馬骨の性別は不明である。

5. 馬歯・馬骨の死亡年齢

馬の死亡年齢は、歯の全歯高で推定が可能である。上下臼歯の全歯高より、死亡年齢は幅を持たせて約9歳～10歳の牡駒馬であると推定される。ちなみに、

馬の年齢区分は、1歳～5歳が幼駒馬・6歳～16歳が壮駒馬・17歳以上が老駒馬である。

まとめ

西川原遺跡の約7世紀後半の古墳時代終末期のB区1号古墳周堀より、馬歯が出土した。この個体は、性別不明で死亡年齢約9歳～10歳の壮駒馬1個体であると推定される。本馬歯・馬骨は、古墳の周堀より出土しているため、葬送儀礼に伴い、殉殺された可能性が高い。

謝辞

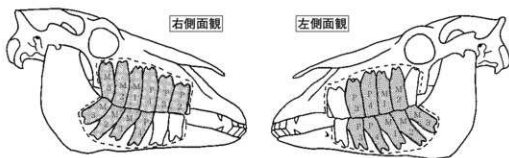
本出土獣骨を報告する機会を与えていただき、出土獣骨に関する考古学的情報を与えていただいた(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の神谷佳明氏に感謝いたします。

引用文献

von den Driesch, A. 1976 *A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites*, Peabody Museum Bulletin No.1, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.



写真2. 西川原古墳群出土馬歯(左:右上下歯側面観、右:左上下歯側面観)



58図 西川原古墳群出土馬歯出土部位図

3表 西川原古墳群B区1号古墳周堀出土馬歯計測値

計測項目	上 顎											
	右						左					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
MD	29 mm	25 mm	24 mm	26 mm	27 mm	33 mm	-	-	26 mm	24 mm	25 mm	-
BL	23 mm	26 mm	27 mm	28 mm	26 mm	22 mm	-	24 mm	27.5 mm	26 mm	25.5 mm	-
全歯高	38 mm	37 mm	31 mm	36 mm	34 mm	27 mm	-	30 mm	35 mm	30 mm	36 mm	-
計測項目	下 顎											
	右						左					
	M3	M2	M1	P4	P3	P2	P2	P3	P4	M1	M2	M3
MD	32 mm	26 mm	25 mm	27 mm	-	-	-	28 mm	27 mm	25 mm	26 mm	32 mm
BL	13 mm	13 mm	14 mm	15 mm	-	-	-	16 mm	17 mm	15 mm	15 mm	13 mm
全歯高	42 mm	45 mm	36 mm	41 mm	-	-	-	33 mm	40 mm	39 mm	41 mm	42 mm

註1. 計測項目は、「MD: 歯冠近縁心径」・「BL: 歯冠近縁心径」を意味する。

註2. 歯種は、「P2: 第2小臼歯」・「P3: 第3小臼歯」・「P4: 第4小臼歯」・「M1: 第1大白歯」・「M2: 第2大白歯」・「M3: 第3大白歯」を意味する。

VI 調査の成果と課題

今回の発掘調査では薄根川上位河岸段丘面に立地するA区、中位河岸段丘面に立地するB区の2調査区で縄文時代の落し穴1基、古墳時代の古墳、小石棺墓各1基、平安時代の堅穴建物5軒、土坑3基、中世～近世の壇1基、土坑15基を検出し、調査した。A区は段丘縁線から傾斜地に立地するためか検出した遺構は落し穴と壇、土坑だけで、遺構の分布は比較的粗の状態であった。これは間接して発掘調査をした生品西浦遺跡(生品西浦遺跡Ⅱの報告書は2009年度に刊行予定)G区、H区と同様な状態であった。B区は西側がA区と同様に段丘崖に近いため遺構がほとんど存在しない状態であったが、縁線からやや内側に入った地点では古墳と堅穴建物、堅穴建物同士の重複も確認できるような状態であった。古墳は墳丘や石室上半を消失した状態であったが、石室下半は比較的良好な状態であった。検出した遺構数は少ないが、若干の成果を記することとする。

今回、発掘調査した遺跡は平成18年1月に川場村教育委員会と群馬県教育委員会によって実施された包蔵地再確認調査で「西川原古墳群」(群馬県文化財情報システムに登録)と呼称されているが、生品地区の古墳を「上毛古墳総覧」(1928年群馬県から刊行)や「川場村の歴史と文化」(1951年川場村誌編纂委員会より刊行)からみると台地を取り巻くように縁線の薄根川左岸下位河岸段丘、中位河岸段丘、田沢川よりに構築されている。これは生品西浦遺跡の発掘調査で明らかのように台地上に居を構えていた首長層や家長層の墓域として台地縁線が利用されたためである。本来なら生品地区の古墳は一括して「生品古墳群」として扱い、薄根川よりの上流部を「生品古墳群西川原支群」、下流部を「西浦支群」、田沢川よりを「前原支群」とするほうが実態にあっていられると思われる。

生品地区の古墳は「上毛古墳総覧」では34基でそのうち前方後円墳が1基、「川場村の歴史と文化」で

も34基で前方後円墳を2基数えるとしている。しかし、現状では前方後円墳については確認されていない。この周辺では沼田市奈良古墳群の60数基に次ぐ規模である。しかし、現在ではほとんどの古墳が耕作による削平、家屋の造成、圃場整備によって消滅し、僅かに10基余りが残るだけになっている。また、発掘調査は村道生品下り線建設に伴って5基(11頁文献NO.1)が行われているだけである。そのうち2基は周堀だけの調査のため詳細は不明であるが、すべて今回調査したB区1号古墳と同様の7世紀代の終末期古墳であった。

今回調査した古墳は1基だけ、残存状態も前述のようにあまり良好な状態ではなかったが、出土遺物には大刀、小刀、鏃、金環などがあり、大刀の銚には象嵌が施されていた。この地域では秋塚古墳群につく3例目の出土例である。また、石室の構造も底面にやや扁平な円礫を敷きつめた鋪石(秋塚古墳群での用語、田篠塚原遺跡では「基壇敷石」)を使用しているが、本報告では「鋪石」を使用した上に石室奥壁、側壁の礎石を設置している。この構造は追墓古墳や昭和村岩下清水遺跡(昭和村教育委員会「岩下清水古墳群」2002年、岩下清水古墳群で発掘調査された古墳はHr-FP降下前に構築された古墳である。)など例外はあるが、秋塚古墳群や奈良古墳群、昭和村川額軍原1遺跡(昭和村教育委員会「川額軍原1遺跡」1996年)、みなかみ町(旧月夜野町)金山古墳群(財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団「大釜遺跡 金山古墳群」1983年)でもみられるものである。しかし、この構造は利根川中流域ではみることができないものである。同様な構造をもつ地域としては吾妻郡東吾妻町小泉宮戸遺跡(吾妻町教育委員会「小泉宮戸遺跡」2003年)、鍋川流域の富岡市田篠上平遺跡(財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団「田篠上平遺跡」1988年)、富岡市田篠塚原遺跡、甘楽町福高胸形遺跡(財団法人 群馬県埋蔵文

化財調査事業団「田篠塚原遺跡・福島駒形遺跡・福島鹿嶋下遺跡・福島椿森遺跡」1998年)の古墳でみることが可能である。これは古代上毛野国西域にあたる。この構造がいつから導入され、どのくらい普及したのかなど詳細な分析・検討については紙面や時間的な制約もあるので今後の課題としたい。

次に平安時代ではB区で堅穴建物5軒と土坑3基を検出した。堅穴建物は出土土器から9世紀後半から10世紀前半代に比定できる。このことは上位河岸段丘面での土地利用に限界が生じたため古墳などの墓域として利用していた中位河岸段丘面も居住域として利用するような結果になったと想定できる。B区が立地する中位河岸段丘面は南側は上位河岸段丘面への傾斜地、西側は下位河岸段丘面への崖面であるが、北側へは比較的広い緩斜面の平坦地が存在する。この平坦面には隣接する栗園に古墳が1基確認できる他に北側の宅地造成時に古墳を削平した話が聞かれることから数基の古墳が存在していたと想定できる。そのため8世紀代までは墓域としての認識が高かったのか居住域として利用することは規制さ

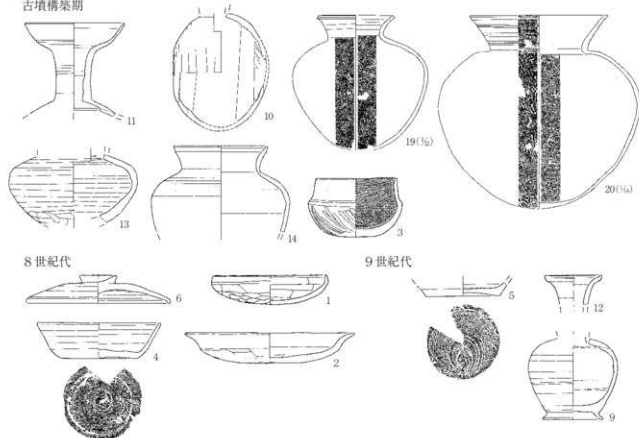
れていた可能性がある。その規制も平安時代9世紀後半代には律令制の崩壊とともに忘れられたためかこの地も居住域として利用されたと想定される。

しかし、ここで問題なのが同じ中位河岸段丘面を墓域として利用している生品西浦遺跡とは様相を異にする点である。生品西浦遺跡でもA区、B区に西川原古墳群と同様に7世紀代に墓域として古墳群が構築されている。そして堅穴建物が検出されているが、この堅穴建物は6世紀代に比定されるもので古墳が構築された後の堅穴建物は発掘調査では確認されていない。居住域としての立地も生品西浦遺跡A区、B区のほうが西南斜面で適していると思われる。

これについては西川原古墳群B区1号古墳も生品西浦遺跡の古墳も石室の同様な小規模であることから追葬が行われたことは考えにくく単独の埋葬であったと見られる。ここで問題になるのが石室前庭部で行われた墓前祭祀の痕跡である。西川原古墳群B区1号古墳は周堀全体を調査していないが、墓前祭祀に使用された土器群をみると須恵器長頸壺、甕と土師器甕の3点を見ることができる。この3点は古

生品西浦遺跡A区1号古墳石室外出土土器 (遺物NOは報告書掲載NO.と一致する)

古墳構築期



59図 生品西浦遺跡A区1号古墳出土土器(S=1/4)

VI 調査の成果と課題

墳の構築年代と大きな時期差を考えにくいことから
 墓前祭祀も埋葬直後に行われただけであると考えら
 れる。

これに対して生品西浦遺跡A区1号古墳では石室
 外から墓前祭祀に使用されたと見られる古墳構築時
 と時期差の無い土器群とともに8世紀前半代から後
 半代、9世紀代にかけての土器群(59図)も出土し
 ている。この状況は他の古墳でも古墳構築時期より半
 世紀から1世紀以上の時期幅で墓前祭祀に使用され
 たと思われる土器群が出土している。こうした状況
 をみると生品西浦遺跡では西川原古墳群と異なり、
 8世紀から9世紀にかけても古墳周辺が墓域に対す
 る意識が強く居住域としての土地利用に規制が働い
 たのではないだろうか。このことについては十分な
 考証ができていないが、今後資料の蓄積をはかり新
 たに考察を行いたい。

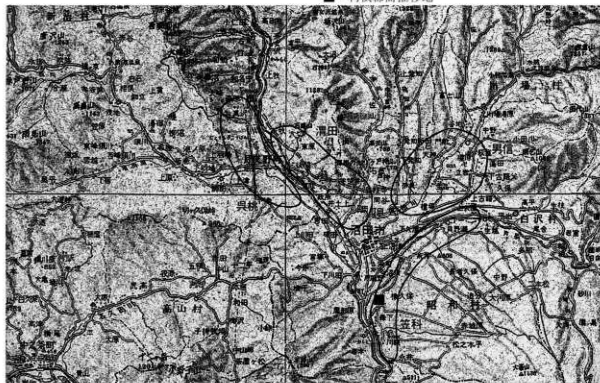
この地域は古代律令制期には文献資料や地名から
 利根郡男信郷に比定されている。「和名類聚抄」によ
 ると古代利根郡には潤田郷、男信郷、笠料郷、呉桃
 郷の4郷が置かれている。それぞれの郷については
 地名や古墳群の様相から潤田郷が利根川左岸三峰山
 西麓の現沼田市下沼田からみなかみ町郷、政所、後
 閑にかけて、男信郷は白沢村西部から川場村南部、

沼田市秋塚町・奈良町にかけて、笠料郷は片品川下
 流域の昭和村と沼田市上久原町から沼須町にかけて、
 呉桃郷は利根川右岸の水の上町月夜野から上津、下津
 にかけてとされている。そして現在、発掘調査でも
 これらの地域から7世紀から8世紀にかけての集落
 遺跡も見つかり郷域の確定も可能になりつつある。

西川原古墳群が所在する男信郷では本遺跡も含め
 60基余りの古墳が確認されている奈良古墳群、10数
 基が確認されている秋塚古墳群、24基が存在すると
 されている天神古墳など有数の古墳群が存在して
 おり、古墳から郷域を想定することは可能である。し
 かし、男信郷とみられる範囲の中で郷戸を構成した
 であろう7世紀から8世紀にかけの堅穴建物は少な
 く生品西浦遺跡Ⅱ調査で僅かにみられるだけである。
 この状態は古代の集落域と重なる現在の生品集落を
 調査しても多くない、これだけの古墳が存在する中
 での集落様相についてはまだまだ検討を必要とする
 ことが多い。

今回の西川原古墳群では検討課題ばかりを列挙す
 る形になったが、今後整理作業を行う生品西浦遺跡
 Ⅱではこれらの課題を少しでも解決できることを期
 待してまとめたい。

■ 利根郡衙推定地



60図 古代利根郡の推定郷域